

考えるということ

街へ、時代へ、跳びだした **東北大学文学部**
ブックレット

ISSN 1882-434X
東北大学文学部・文学研究科
September 2015 Vol. **10**

この本の立場 ▶ 実利偏重・通俗功利主義がはびこる時代、東北大学文学部・文学研究科は、あえて「人文知の価値」を示したいと思います。この本は、軽微浮薄な文化への対立軸としての重厚な伝統的学問文化を守り、発展させる媒体です。現実の問題から目をそらすではありません。「企業の社会的責任」を意識する先進的な企業と対話・連携し、あるいは書店や図書館、地域社会との対話を通して、人文社会学的立場から、責任を持った発言をしていきます。さらに、大学で学びつつある、あるいはこれから大学で学ぼうとする若い世代に、「真の実学」としての人文社会学の心髄を伝えたいと思います。ネットを中心に、匿名性を隠れみのとした無責任な発言が、なんとあふれかえっていることでしょうか。この本では、研究者—高校生—大学生—卒業生—企業—地域社会を結んで、＜文学部流＞を徹底したらこうなる、という情報の発信をめざしていきます。

3つのシリーズ特集

シリーズ企業との対話・社会との対話 **10**
巻頭座談会

海外大学との学術交流を、どう高め、広げていくか…

東北大学文学部の歴代研究者メモリアル **10**

日本の「現象学」研究の基礎を築いた哲学者

高橋里美博士

15

文学部の研究紹介 **10**

東洋・日本美術史

長岡龍作教授

日本の仏教美術研究のフィールドで

19

日本語と外国語

1853年のペリー来航、1854年の日米和親条約の締結以後、1871年の岩倉外使節団による欧米視察などを経て、日本人の英語との接触が本格的になつていった。例えば、啓蒙思想家であり教育者である西周（1829-1897）は、1870年の「百学連環」、1874年の「百一新論」、「致知啓蒙」、1875年の「心理学」などの出版により、science philosophy, mental philosophyなどに「科学」「哲学」「心理学」などの翻訳語を対応させていったと言われ、このような先人たちの外国語読解によって、百数十年の時間で多くの国の著作物を日本語に翻訳し、日本語で内容を理解できるようになってきた。学術的な内容もほとんど日本語で考え、日本語で表現することができたため、国内研究者からのノーベル賞受賞者誕生も実現していると考えられる。しかし、研究フィールドによっては日本語を中心として思考していくのか、はじめから外国語を意識していくのか、これまで以上に強く迫られることなのではないか。日本語と外国語との間で、微妙なニアンスの違いによる齟齬はないのか、並行して検証していくことも欠かせないことだろう。

広く、深く、高く!! 多彩なシリーズ

図書館・書店との対話 **10**

12

文学部へ行こう **10**

仙台文学館との対話
開館記念特別展以来の
深いおつきあい

総合性（リベラルアーツ）を世界へ、地域へ
キャンパスの変化も大きな力に

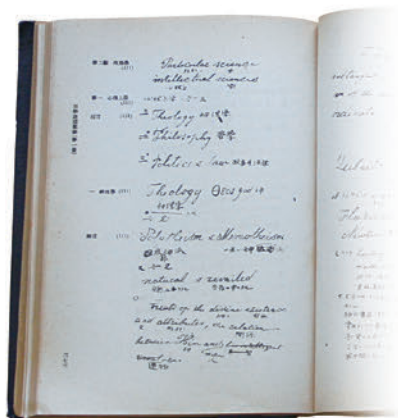
文学部ゆかりの宝もの **10** 災害アーカイブの取り組み

みちのく震録伝

32

30

28



写真：「西周全集 第一巻」中「百学連環」のページより。
「philosophy 哲学」の語が見える

写真：東北大学附属図書館所蔵西周「心理学（二）」の表題部分



2

海外大学との学術交流を、 どう高め、広げていくか…



文学研究科では、「文化理解(解釈)のキーワード」により、視野を世界へと広げ、国際交流への取り組みを発展させています。

その代表的な取り組みの一つが、2013年3月から実施しているイタリア・ローマ大学、オランダ・ライデン大学との連携による「国際学術交流事業 国際シンポジウム」であり、もう一つが2014年10月から実施している外国人留学生を短期受け入れする「21世紀のシーボルト養成プログラム」です。

三大学の国際シンポジウムは、2015年6月には東北大学を会場として第3回目を開催し、21世紀のシーボルト養成プログラムは2015年には第2期へと進んでいます。

イタリアとの関係では、ヴェネチア大学、ナポリ東洋大学、フィレンツェ大学などとの学術交流協定校協定を結ぶなど連携を強化しており、2015年10月にはフィレンツェでの国際シンポジウム開催の準備も進んでいます。

さらに2018年には、「日本学」に関する国際的大学院の設立も決まっています。

これらのプロジェクトに深く関わっているのが、国際交流室:高橋章則教授、美学・西洋美術史専攻:尾崎彰宏教授、フォンガロ・エンリコ准教授です。具体的な取り組みを振り返りながら、海外大学との交流への意欲を語り合いました。



2015年6月、

第3回「東北大学・ローマ大学・ライデン大学学術シンポジウム」開催

2015年6月27日、新築された文系総合講義棟(川内南キャンパス)を会場に、「東北大学・ローマ大学・ライデン大学学術シンポジウム」が開かれました。

文学研究科がローマ大学(イタリア)、ライデン大学(オランダ)との連携により進めている「国際学術交流事業 国際シンポジウム」の第3回目であり、2013年3月18日にローマ大学で開いた第1回(テーマ:ヨーロッパから見

た日本、日本から見たヨーロッパ)、2014年3月24日にライデン大学で開いた第2回(テーマ:身体性をめぐって)に続くものです。

「Disciplines Meeting Japanese and European approaches to Cultural Transmission」(文化伝達:東と西の出会い)をテーマに、9:50~18:00の時間、以下のような3部構成で一般公開のシンポジウムが行われました。

Program

Session I

① Another Episteme: Understanding European World Views in Early Modern Japan (Leiden University: Prof. Ivo Smits) in Japanese

② Research on the basis of Japanese prints and printed books in Dutch Public Collections (Leiden University, Modern Volkskunde: Prof. Matthi Forrer) in English

Coffee break

③ East and West in Medieval and Renaissance Cartography: Representation of England and Japan in Vatican Map Loggia (Utrecht University: Assistant Prof. Natalia Petrovskaja) in Japanese

Session II

④ フランスにおける日本の芸術遺産の評価と普及-美術館の役割- (Sophia University: Prof. Laure Schwartz-Arenales) in Japanese

⑤ A New View of Rembrandt's Etching The Shell (B159)-Sharing Dreams of Asia as a "Community of the Imagination" (Tohoku University: Prof. Akihiro Ozaki) in English

⑥ The Sicken Body of the Nation (University of Roma 'La Sapienza': Prof. Marco Del Bene) in English

⑦ via Skype (University of Roma 'La Sapienza') in English



佐藤弘夫文学研究科長



柳原敏昭文学研究科副科長

シンポジウムは、文学研究科・高橋章則教授の総合司会によりスタート。まず開会の挨拶に立った佐藤弘夫研究科長は「ナショナリズム、人種差別などの問題は、文明の進化、深まりによって国境がなくなっていくことで解消されていくだろうと考えられていた。しかし、それによって新たな問題が起きているという逆の面も生まれているように思われる。こうした状況に切り込むのが人文科学の役割ではないか。東北大学文学研究科では、そのような視点から、国境や学問の垣根を超えて、新しい学問をつくりだすための試みとして、このシンポジウムのような国際的な取り組みを進めている」といった趣旨で、シンポジウムの意義を強調し、参加者の歓迎の言葉を述べました。

続いて高橋教授は、2011年2月にライデン大学との学術協定が結ばれたことが画期となり、ローマ大学との連携にも進み、2013

年から国際交流シンポジウムを開催するに至ったこと、ライデン大学との交流の中心になってくださったのがイフォスミッツ教授であったことを紹介し、セッションへと進みました。

第1セッションでは、ライデン大学からの文学研究科留学生であるニールス・ファンデルサルムさんが通訳に当たり、第2セッションでは文学研究科フォンガロ・エンリコ准教授が司会、進行に当たりました。

第2セッションの最後には、マイクログフトの無料インターネット電話サービスの使用を促して、ローマ大学から2人の教授が講演を行い、質疑も含めたやりとりは40分にも及びました。ローマは朝の10時頃でしょうか、数千キロ離れた場所とリアルタイムの会話が盛り上がりしました。

そして18時すぎ、文学研究科・柳原敏昭副科長が立ち、「文学研究科では10月にフィレンツェで大きなシンポジウムを開催する予定であり、また近い将来には国際的な日本学の大学院を立ち上げたいと考えている。このシンポジウムで、世界に開かれた日本学とはどういうものなのかというイメージが湧いてきたのではないかと。また、日本政府は人文科学を軽んずるような姿勢を露にしているが、人文科学は不可欠な学問なのだというアピールをしていく機会ともなったのではないかと。改めてこのような企画を積み重ねることによって、さらにアピールしていくこうと思つた」と語り、会を締め括りました。

シンポジウムで語られたこと(二部レポート)

ちなみに、このシンポジウムではどのようなことが講演され、質疑が行われたのでしょうか。一部を紹介しましょう。

■イフォ・スミッツ教授の講演

Another Episteme: Understanding

European World Views in Early Modern

Japanと題した講演は、「もう一つの知識論：

近世日本におけるヨーロッパ世界観の析出」の

日本語タイトルを付した資料が配布されま

した。その要旨は、左記のとおりです。

スミッツ教授は、エムブレムの例としてイソッ

プのような動物寓話も取り上げながら、ヨー

ロッパ文化に接し、理解しようとした前野良

沢、司馬江漢、田澤春房、森島中良、山村才

助、大槻玄沢などの多くの蘭学者について触

れています。

普段、日本近世における日欧思想的交流史は、蘭学という分野に集中する解説が多い。特に科学史と美術史の両面で、その蘭学の「知識製品」は経験的な知識に基づくものが中心になる。

同時代の16～18世紀のヨーロッパでは、「エムブレム」(ラテン語: emblema)は重要な教訓資料となっていた。エムブレムは、金言か標題・絵・解説(警句)の三つの要素からなっており、これらを組み合わせて教訓のメッセージを伝える役割を有するものである。普段の生活でも、エムブレムに組み込まれた譬え話と譬喩画を利用して語りながら、聞く者に教訓を与えたのである。この「エムブレム的世界観」は大きな影響力を有していたが、18世紀に至り「科学的世界観」が発達するに至って、ヨーロッパの思想は大きな転換を迎えることとなった。

江戸時代後半の蘭学者達も、日本にもたらされたエムブレムに出会い、それがヨーロッパにおける大切な知識の伝達手段であることを認識しつつも、その解釈の方法に悩み、新たな科学的世界観との関連性について疑問をいだきつつ、エムブレムを通していかにヨーロッパの文化制度を理解するかを議論しあっていたのである。

この発表では、ヨーロッパにおけるエムブレムの構造と発展の歴史を説明し、日本の近世におけるエムブレムの影響と受容の有様について説明してみたい。



■ナタリア・ペトロフスカヤ准教授の講演

East and West in Medieval and Renaissance

Cartography: Representation of England and

Japan in Vatican Map Loggiaと題した講演

は、日本語で話されました。

バチカンで日本とイギリスの地図に関する

研究プロジェクトに参加していたことに触れな

がら、中世以後の世界地図の変化について紹

介。イギリスのキリスト教文化圏では、またバ

チカンのカトリック文化圏では、さらにはそれ

以後の時代には、世界がどのように把握され

地図に表現されたのか、多様な地図を比較し

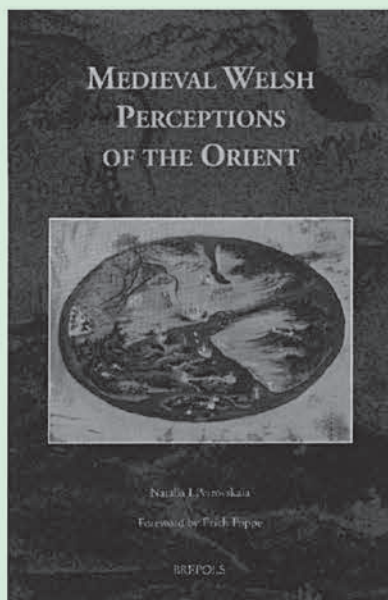
ながら説明されました。

なお会場では、講演に関連する資料として、

ペトロフスカヤ准教授が著した『MEDIEVAL

WELSH PERCEPTIONS OF THE ORIENT』

がPRされました。



■尾崎彰宏教授の講演

また、A New View of Rembrandt's Etching The Shell (Bl.59)-Sharing Dreams of Asia as a "Community of the Imagination"と題した尾崎彰宏教授の講演は、概要をまとめた資料が配布された上で、英語で話されました。その始まりが左記上段の抜粋です。

Introduction

In 1642 Rembrandt's beloved wife Sakia died. The latter half of the 1640s was also a time of decreased artistic production for Rembrandt. His immediate surroundings and his love / hate relationship with Geertje Dirckx, the widow who lived with him as his infant son Titus's wet nurse, meant that his home life was hectic. The interactions with Geertje eventually ended in 1650. That year Rembrandt produced his etchings of a shell. Shells with their exotic air; these rare shells brought to Europe from overseas were the objects of undying fascination for the collectors of the time.

It seems that it is a human trait for artists to focus on new forms and ideas that could enrich and enliven their own arts. The art works born from such "dialogues", whether intended by the artists or not, are etched with the memories of a single period. Rembrandt's The Shell was the product of the imagination regarding far off Asia, as it occurred in 17th century Holland, long before the development of the imperialist concept that would become all the more striking from the 18th century onwards. The existence of a "community of the imagination" regarding a longed for land comes to mind.

以下、尾崎教授は、4部構成でレンブラントのエッチングの構造についての研究成果を紹介。

1. The World of the Shell
 2. The Symbolism of Shells
 3. Collection as Consumption
 4. In Invitation to the Longed For Land
- 左記下段のようにまとめています。



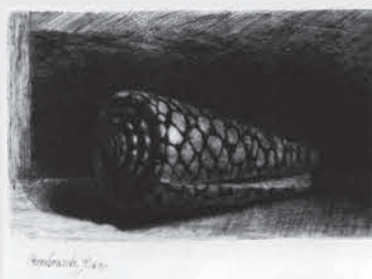
日本語での講演をまじえながらも英語を主体としたシンポジウムは、国際会議では当然のこととは言え、集まった日本人聴講者にとって非常に印象的なものとなりました。



Rembrandt, The Shell, 1650
State I



State II, 1650



State III, 1650



Jodocus Hondius, The Map of the World

2013年3月、「東北大学・ローマ大学・ライデン大学学術シンポジウム」の始まり

高橋 この三大学シンポジウムの構想が形になったのは、2011年2月にオランダのライデン大学との協定がまとまったところからでした。

なぜ、オランダであり、ライデン大学だったのか。実は、私はインドネシアに行つてインドネシア大学を拠点にして日本学を教えていました。それで先生や学生との交流関係ができ、インドネシアから東北大学へ懇親に来てもらったり、論文を書くために大学院に来る学生もいたりといった関係になっていました。このインドネシアはオランダの植民地だった時代があり、インドネシアとオランダの強い交流からオランダに留学する学生が日本よりも多いという状態でした。インドネシア大学の教授陣にはライデン大学で学んだという人がいました。そしてライデンは、日本と関係の深いフォンシーボルトが教壇に立ったことのある大学であり、世界で最初に日本研究所が開かれた大学です。

インドネシア大学とライデン大学と東北大学を結ぶ三角形をつくったら、インドネシアの人もオランダの人も日本にもっと目を向けてくれるのじゃないか、と私は考えました。そう考えてネットワークづくりに着手したのが2000年の頃でした。

尾崎 そうでしたね。私が東北大学に来たのは2000年頃のことでしたが、その頃に「人の移動」をテーマにした国際交流のプロジェクト構想がありました。学長裁量経費で国際交流事業を具体化して行く、というものだったと

思いますが、その中にインドネシアの話もあり、高橋先生からインドネシア行きを誘われたのです。二つの種をまいて芽が出るまでに10年かかったということになりますが、その当時一緒に何かできようかと思ったことは確かでした。

高橋 それでライデン大学との協定に取り組んできた結果、東北大学文学部とライデン大学文学部の学部間協定が2011年2月にまとまったという経緯です。

それまで、学部間の国際交流は1対1の関係でした。そのためになかなかそのネットワークが太いものになりませんでした。それで、ライデン大学との交渉を進めている段階で、私はネットワークを太くするための方策としてヨーロッパの他の大学との三角形の輪をいくつもつくり、シンポジウムのような形で拡大していけないかと考えて、ヨーロッパに強い尾崎先生に相談したのです。

尾崎 高橋先生に声をかけられて思いついたのが、ローマ大学でした。実は、ローマ大学との間には私も関わった長い経緯があつて、2010年に協定が結ばれていたからです。

美学 西洋美術史専攻の恩師である田中英道先生（東北大学在籍1973-2006年。現在、名誉教授）が、1980年代終わり頃にローマ大学との協定を結んでいました。退官される時に後を託されたのですが、私の専門領域はオランダやベルギーで、直接にはイタリアとの関係が薄いところで任されたもので

すから、正直、最初はどうしたものかといった状態でした。

動きだしたのは、2005年。今回のシンポジウムでも講演していただいたマルコ・デル・ペーネ教授が交流の担当になられて来学されたことが大きなきっかけでした。そして2007年には、東北大学の100周年記念式典にローマ大学からは学長以下大勢が来学されたのですが、その時、ローマ大学東洋学研究所のマティルデ・マストランジェロ教授から「学術協定と学生交流の協定を具体化していかないと、ローマ大学は何も動きません」と言われたのです。そこから本気に取り組み始めたという経緯があります。

2009年、ペーネ先生とメールなど活用して何度もやりとりを重ねました。そして、ローマ大学を訪問して大勢の先生方と話し合いもして具体的な協定書づくりを進めました。そんな時に、高橋先生がライデン大学と交渉していることを聞き、ローマ、ライデン、仙台を結べたらおもしろいな、高橋先生が話に乗ってくれば何かできるぞと感じていました。以心伝心だったのです。

そして決定的だったのが、フォンガロ先生が東北大学に来られたことでした。

フォンガロ 私は、文部科学省の国費留学生として来日し、京都工芸繊維大学で日本の学問を始めました。研究テーマは「アイデア」と西田幾多郎の比較でした。しかし、西田について学

んでいるうちに、ヨーロッパの哲学とは違う哲学というか、ヨーロッパではない文化に出会ったという思いで、ハイドガールから西田の方へ関心が移っていきました。この時感じたのは、他文化と出会って初めて自分が変わり、自分の国の文化に対する視線も変わるんだということでした。

その後、いろいろな大学で非常勤講師などをしている間に、東北大学でイタリア語教員を募集していたので応募したのです。東北大学には西洋美術史専修の中でイタリア語の先生のポストが昔からあるということは知っていました。

実は、東北大学への関心はそれだけではなくありませんでした。ハイドガール研究、西田研究をする中で、日本の現象学研究の中心であり、西田とも深い関係のある高橋里美博士（哲学）が教授をされ、学長にもなった大学として知っていました。また、ハイドガールの一番弟子であるカール・レーヴィット博士が東北大学（当時は法文学部）で教えたことがあるということでも、東北大学への強い関心がありました。

また、仙台という街は、私の大好きなヴェネツィア生まれの建築家、カルロス・カルバが、平泉の建築物を見ようとして北へ向かっている途中、仙台に滞在している時に亡くなった（1978年）ということを知っていました。私の故郷であるヴェネツィア近くの伝統的建築と日本の建築を合体させたような彼の建築が私は大好きだったので、彼がよく見て歩いたという京都で学び始め、今では彼が最後に滞在していた仙台に住んでいます。

尾崎 この話は、雑談などの中で聞いたことがあります。だから私たちは、フォンガロ先生を引



高橋 章則教授
(国際交流室留学生担当)
Takahashi, Akinori

東北大学文学部卒業、文学研究科修了。一橋大学で社会学の博士号取得などを経て現職。江戸時代の出版文化、文化交流史を研究分野とし、『江戸の転勤族一代官所手代の世界』、『狂歌陸奥百歌撰』などの著書がある。

き込み、高橋先生…人集め、フォンガロ先生…外交、尾崎…広告塔という三人一組で国際交流事業の具体化に取り組んできました。

高橋 フォンガロ先生のように、日本に関心の深い国外の研究者は潜在しているのです。しかし、なかなか仙台にまでは関心が向けられません。フォンガロ先生のように、個人的な関心を深めるきっかけがあった人が辛うじてつながるという状態です。

これは東北大学のコマーシャル不足という要因が大きく影響しています。フォンガロ先生も言われたように、日本思想史研究などは東北大学で始まったとも言えるほどの土壌があるのに、しっかりとアピールできていません。フォンガロ先生の中でつながったように、これでもか、これでもかという風に具体例がながるようにならなければならないのですが、全く手つかずの状態です。三大学交流事業やシーボルトプ



尾崎 彰宏教授
(美学・西洋美術史専修)
Ozaki, Akibiro

東北大学文学研究科博士課程修了。文学部助手、弘前大学教授などを経て現職。ルネサンス以降の西洋美術史、美術理論を研究分野とし、『レンブラントのコレクション』『フェルメール』『ゴッホが挑んだ「魂の描き方」』などの著書がある。

ログラムは、大勢の「フォンガロ先生」を育てるという、まさにその始まりの「一歩だ」ということなのです。

フォンガロ 私は日本で学び、イタリアやヨーロッパと全然異なる文化があるということを経験をしていなければ、自分のアイデンティティ、私は誰かということを考えることさえなかったのではないかと思います。

この経験を学生にも伝えたいなと思っていました。外国からの留学生が隣にいて、会話をしてみる。少しくらい間違っても話してみる。そういった経験は、本当に外国を知る上で効果的だと思います。イタリア語を教えているのも、学生をイタリアに留学させたいという思いからです。

だから、尾崎先生に声をかけていただいた時、すぐにお手伝いすることになりました。このような活動が始まれば、イタリアからの留学生と日



フォンガロ・エンリコ准教授
(美学・西洋美術史専修イタリア語担当)
Fongaro, Enrico

イタリア・パドヴァ大学哲学科修了。京都工芸繊維大学大学院博士課程単位取得。南山大学非常勤研究員を経て現職。"Uno studio sul bene" (西田幾多郎「善の研究」)、『Luogo』(西田幾多郎「場所」)などの著訳書がある。

第1回「東北大学・ローマ大学・ライデン大学」 学術シンポジウム(概要)

開催日:2013年3月18日

会場:ローマ大学

テーマ:ヨーロッパから見た日本、日本から見たヨーロッパ

(シンポジウムの統一テーマは「Keywords for mutual appreciation of different cultures」)

プログラム:千種眞一教授(言語学)、尾崎彰宏教授(美学・西洋美術史)、高橋章則教授(国際交流室留学生担当)、フォンガロ・エンリコ准教授(美学・西洋美術史)、川口幸大准教授(文化人類学)、大野晃嗣准教授(東洋史)が参加し、尾崎教授、高橋教授、フォンガロ准教授が講演した(各自の講演テーマは割愛)。



本人学生の交流も深まるのではないかと思います。

高橋 フォンガロ先生が加わったことにより、

ローマ大学との交流にも弾みがつきました。そして2013年3月、ローマ大学での第1回シンポジウムに漕ぎ着けることができました。

尾崎 ローマ大学の特徴を意識して現代美術、ラテン語や詩、日本学などをテーマとし、「ヨーロッパから見た日本、日本から見たヨーロッパ」の

タイトルでローマ大学、ライデン大学からの参加を得ることができました。

第2回「東北大学・ローマ大学・ライデン大学」学術シンポジウムへ、「21世紀のシールボルト養成プログラム」へ

尾崎 実際に始めてみると、専門の異なる講演者だったのですが、それなりのディスカッションになりました。走り始める前はなんとなくけだるい感じがしても、走ってみると爽快になるというスポーツと似たような感じで、やつてよかったという結果になりました。そして2回目はライデンとなりました。

2回目になるとまた不思議なもので、国境を越えて「お久しぶりです」といった雰囲気になるんですね。ライデン大学サイドも熱心で、いろいろと準備をし、図書館を見せてくださったり、懇親会も賑やかなものになり、「また来年です」といった話題で盛り上がりました。

高橋 当然、3回目は日本開催ですが、私たちのサイドでは実は、フイレントゥエでのシンポジウムの計画を始めており、フイレントゥエにまわってしまおうかといった案も持ちかけたのです。

尾崎 すると、確かローマ大学からですが、フイレントゥエとは別に3回目を開こうという話が出されたのです。私には意外でした。イタリアに

本で3回目を開こうというわけです。それで、2015年6月の東北大学での第3回シンポジウムの開催となりました。加えて、3回分を出版物にまとめようという話にもなっています。

フォンガロ 今、私は全学教育と文学部のクラスでイタリア語と西洋美術史を教えています。が、合計で100人くらいの学生が受講しています。読書会等の活動もしています。文学部の学生は80人くらいで、美学・西洋美術史のほか、フランス文学、ドイツ文学、ヨーロッパ史などの学生もいます。ラテン語と併せて受講している学生もいます。メキシコ、中国、台湾、アメリカなどからの留学生もいます。

それらの学生が、この三大学シンポジウムにほとんど参加し、これをきっかけにイタリアへ、ヨーロッパへと飛び出すようになってくれるといいなと思っています。

尾崎 実はイタリア語は、ヨーロッパの文化を理解していく上で一番の中心になるものなのです。古代から現代まで切れ目なくヨーロッパ文化を展開させてきているのはイタリアだけです。ヨーロッパの歴史や文化を理解する上で、中心に学ばなければならないのは英語でもフランス

語やドイツ語でもなくイタリア語なのです。だから、東京大学や京都大学ではイタリア

語が第二外国語に入っているように、東北大学でも第二外国語に入れるべきなのですが、残念ながら現在はそうなっていないですね。三大学シンポジウムなどの取り組みをチャンスに、イタリア語のポジションが高まり、学習する人が増えていくことも期待しています。

第2回「東北大学・ローマ大学・ライデン大学」学術シンポジウム(概要)

開催日:2014年3月24日

会場:ライデン大学

テーマ:身体性をめぐって:日本とヨーロッパ、それぞれの視点から肉体の概念に近づく (Viewing the Body: Japanese and European approaches to concepts of the corporeal.)

プログラム:尾崎彰宏教授(美学・西洋美術史)、高橋章則教授(国際交流室留学生担当)、川口幸大准教授(文化人類学)、岩田美喜准教授(英文学)、フォンガロ・エンリコ准教授(美学・西洋美術史)、大野晃嗣准教授(東洋史)、山田京子(美学・西洋美術史院生)が参加。第1回シンポジウムに続くテーマで、全員が講演・発表した。(各自の講演・発表テーマは割愛)



尾崎 ところで、今回の三大学シンポジウムをお聞きになった人には気がついたことがあるのではないのでしょうか。英語での講演と日本語での講演が混じっていました。ほとんどの講演がパワーポイントを使って、イメージを見せながら話されていたと思います。これは、過去2回のシンポジウムでも当たり前の姿でした。私たち、日本サイイドの研究者もデータを持参して画像を駆使して報告をしました。

これまでの文学系の研究においては、画像を使うなどということは美術史や考古学などを除いてほとんどなかったことでした。しかし今では、文字だけの説明ではなく、図解を加えることによってイメージを広げ、多文化理解を促

すという流れになっています。

言葉の場合、言葉が分かなければとっかりさえつかめません。英語で話された途端に「フーサンキュー」となりますし、イタリア語ならもっと強く「わかりません」となります。

しかし、これに画像が加われば、単語をつなぎ合わせることができ、自分の問題意識と結びつけることができるようになります。疑問もぶつけやすくなり、聞き、話し、理解するというプロセスが生まれます。言葉を完璧に覚えなければいけないというのは理想を求めるようなものですが、10年勉強してもできないかもしれないし、分からなければ背を向けてしまします。しかし、イメージ化できるようになったことで、

理解に向けて扉が大きく開かれます。

高橋 三角形のネットワークをつくろうとした三大学シンポジウムには、そういう方法論へのチャレンジの意味合いもありました。オランダ語、イタリア語、日本語を母語とする研究者が英語を中心にして発表を行うことにしたわけですが、英語が母語ではないのですから完璧なコミュニケーションになることはできないでしょう。しかし、それをイメージが補います。英語で表現した二つの事が、オランダ語では、イタリア語では、日本語ではどう説明されるのか。質疑し合う中で、理解が深まり、新しい視点も生まれていくでしょう。

シボルトプログラムの場合も、「シボルト」

とネーミングしたことが実はイメージングなわけです。

尾崎 一つのキーワードが出てくると、そこからイメージが広がります。もちろんイメージにも誤解を招くような場合がありますが、イメージの効用は捨てがたいものがあります。

最近の学生は、保守的というか、臆病になっている部分があり、今回のシンポジウムや研究会のようなものにもなかなか足を運ばないというところがあります。しかし、イメージからのコミュニケーションが可能なが分かれば、利用してみようという流れも生まれてくるのではないかと期待しています。

2015年10月、フィレンツェで日欧「日本学」連盟シンポジウム開催

尾崎 昨年だったと思うのですが、懇親の席で佐藤研究科長から三大学ネットワークをもっと広げることはできないだろうかという話がありました。研究科長のそのような希望については、高橋先生からもお聞きしていたことだったので、本気で考えてみましょうと答えました。そして、相談したのがフォンガロ先生でした。

フォンガロ 尾崎先生から、イタリアで新しくシンポジウムのような国際的なイベントを開くにはどこがいいだろうか和相談されたのです。それなら、地理的に真ん中にあつていろいろな条件がクリアできるフィレンツェがいいでしょうと

推薦しました。

高橋 そこからヨーロッパ各国の学術交流協定校で、「日本学」のある大学を中心に交渉を始めて、2015年10月29日・30日、フィレンツェで日欧「日本学」連盟シンポジウムを開催するところまで漕ぎつけました。「21世紀の支倉常長プロジェクト」と名づけ、テーマを「学びの作法ー対象としてのニッポン、方法としてのニッポン」として、日本学の研究者に集まっていたとき、研究成果を報告しあい、質疑を深めようというものです。

尾崎 高橋先生の話を中心に学内を固め、フォンガロ先生が中心になって協定校などとの交

渉を進めました。そして7月末現在で、ヨーロッパ各地から、以下のような参加が得られるに至っています。

ライデン大学は、6月の三大学シンポジウムで講演してくださったイフォスミッツ教授が参加してくださる予定です。

フォンガロ フィレンツェで開催なので、イタリアの参加大学を多くできてホッとしています。

■フィレンツェシンポジウムの主な参加大学

イギリス シェフィールド大学(1人)	オーストリア ウィーン大学(2人)
フランス パリ第7大学(1人)	イタリア ローマ大学ラ・サピエンツァ(3人)
ベルギー ヘント大学(1人) ルーヴァン大学(1人)	ヴェネツィア大学(3人) パドヴァ大学(2人) ボローニャ大学(1人)
オランダ ライデン大学(1人) ユトレヒト大学(1人)	フィレンツェ大学(5人) ナポリ東洋大学(2人)
ドイツ ハイデルブルグ大学(2人)	ポーランド ヤギェウォ大学(1人)
	日本 東北大学

高橋 先にも言いましたように、私たちは、線

ではなく面で物事を考えようと思いました。東北大学にはアジアとのネットワーク、アメリカとのネットワークはありましたが、ヨーロッパとのネットワークは弱いものでした。三大学シンポジウムやシールボルトプロジェクトによって動きたしたことによって、線から面となり、このネットワークができたのだと思います。

尾崎 このネットワークも、さらにイギリスやフランスへの繋がりを太くしていかなければ

2018年、「日本学」大学院設立(予定)

尾崎 私たちが取り組んでいる三大学シンポジウムやシールボルトプログラムなどの活動は、本当のところどのような意味を持っているのでしょうか。私たちは、「日本学」を日本語や日本文化についての研究、いわゆる「ジャパノロジー」という従来の視点だけではなく、日本という場所からの視点、「ジャパニルッキングアウト」という「エリア研究」を超えた視点からとらえようとしています。

いま、社会の根本的な変化に対応して、人文科学は、自然科学系の学問などと協力しながら、社会の紛争解決、環境問題、持続性の問題など、現代の課題そのものにコミットメントしていくことが求められています。国際化、国際交流とは、そのような時代の問題に対して、多くの知性と連携して課題解決に取り組んでいくということなのです。

な面になつていかなければ。ロンドン大学では、東洋アフリカ研究学院(SOAS)、それにシエフィールド大学と交渉しています。

高橋 ロンドンとは以前には太いつながりがあったのですが、いつのまにか切れてしまっていました。協定などは、個人の頑張りによって学部全体で具体的な行動を積み上げていかなければならないと、線が細くなり、やがて消えてしまいます。次の人つないでいくという構造的な取り組みが絶対に必要なのです。

世界がグローバル化している中で、必要なのは、アメリカが中心であるとか、ヨーロッパが中心であるとか、中国が中心であるといったことではなく、あらゆるところが中心であり、同時に中心でないという視点です。ある場所から見るとどう見えるのか突き詰め、ぶつけあつてトータルしていくという方法論の問題、「メソドロジー」というものを考えていきたいと思っています。

高橋 その方法論の一つの到達点として文学研究科で進めているのが、「日本学」大学院という構想です。海外協定校との間で連携し、「日本学」を学んでいる学生、学ぼうとしている学生を東北大学に呼び寄せ、研究拠点としようというものです。

私は、「日本学」というものを考えるとき、日本から「日本文化はこういうものだ」と発信しようというのではないと感じています。

尾崎 三大学シンポジウムが終わったところで

素早くという気持ちから10月を予定しましたが、ヨーロッパでは実はその頃が学会花盛りの時期です。既に予定が決まってしまうという大学も少なくなく、ドイツなどもなかなか足並みが揃いませんでした。よくもここまで集まってくれたという気持ちです。

フォンガロ 交渉に当たっては、三大学シンポジウムやシールボルトプログラムのことも話しました。その成果が大きな力になったことは間違い

ヨーロッパに出てみると、ヨーロッパの国々でももちろん、研究者個人個人でも関心が異なっており、日本で考えている「日本研究」とは違うものであるということが分かります。外へ行けばもっと別の日本学があるというのが、私の立場です。

若い学生や研究者たちなら、いくらでも外へ出て行つて、さまざまな姿を見ることができると。研究の場所、そして研究の分野や領域を簡単に行ったり来たりできるようにすれば、複数の研究成果や研究視点を獲得した研究者が育っていくだろう、というのが私が「日本学」大学院に期待している内容です。

三大学シンポジウムやシールボルトプログラム、あるいはフィレンツェシンポジウムでつながりができた大学や研究者に働きかけて、学生の留学をアピールしています。

尾崎 新しい国際交流の中で、新しいルール作りに関わっていける人間づくり、あるいは表には立たなくても縁の下で力持ちはな立場で社会

ありません。

高橋 フォンガロ先生の交渉力が生きて、多くの大学の参加が得られました。しかし、今回のイベントには参加していただけても、それが継続的な関係になるかどうかはわからない大学もあります。フィレンツェのシンポジウムを打ち上げ花火にして、共有関係をさらに強固にしていくことが大事だと私たちは強く感じているところです。

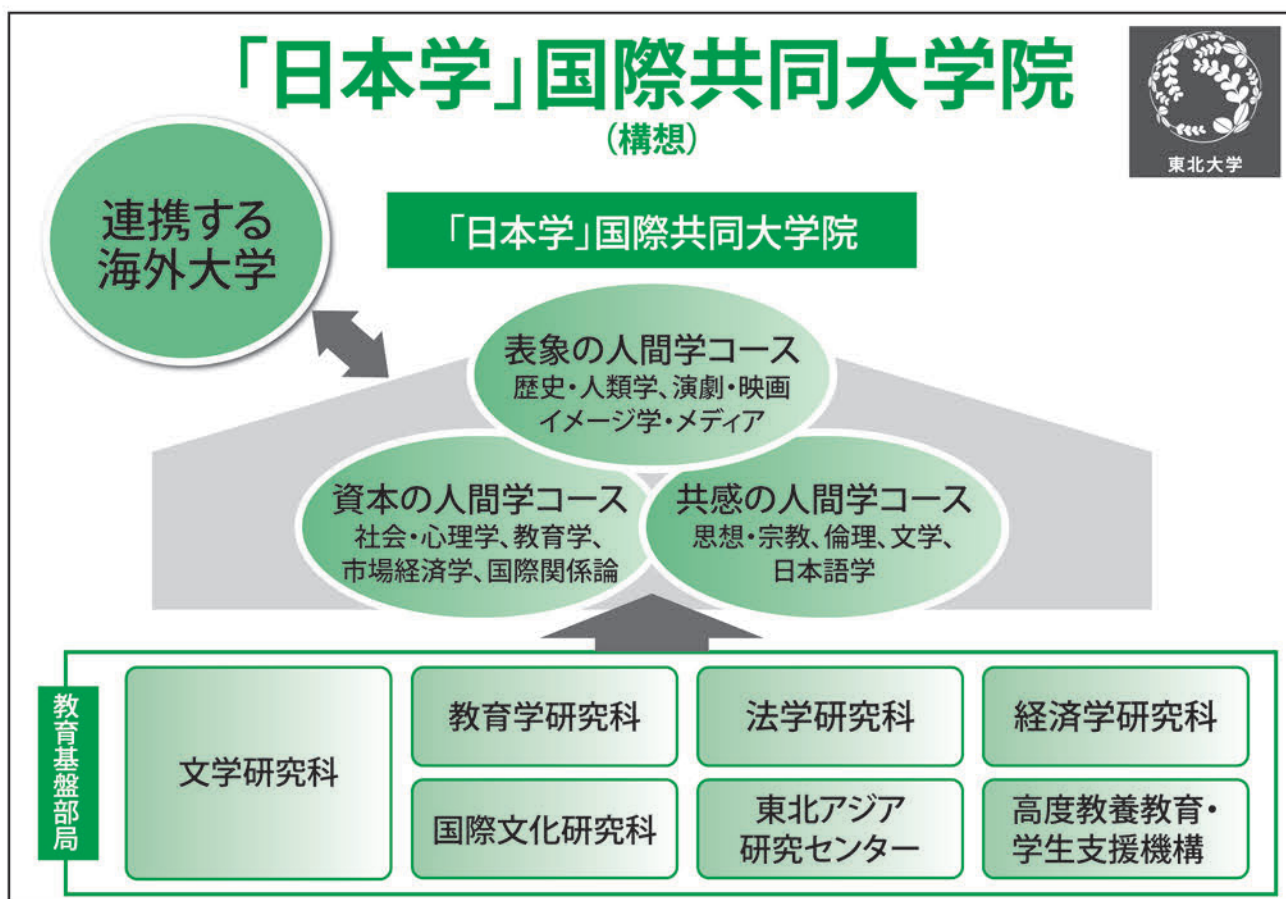
を支えていけるような人間づくりができないかという考えですね。

縁の下で力持ちというのは、日本人の良さのように言われますが、そう簡単にできるものではありません。実は全体が見えていないとできないのです。全体が見える人間を育てていくことができないか、と私たちは話し合っています。

10月に予定しているフィレンツェのシンポジウムもそうですが、この大学院構想では、ヨーロッパの研究者で、伝統的なヨーロッパの学術に閉じこもっている人ではなく、広い関心を持っている人々と交流し、それらの人々を東北大学へ呼び込むことによって、全体を見通すことができる人材育成を目指すというのが大きな柱となっているのです。

高橋 そういう考えに立てば、もう「国際日本学」といった形で「国際」とか「日本学」とか名づける必要はありません。

フォンガロ 用語にこだわるのではなく内容が



大事だというのは、そのとおりだと思います。例えば「日本学」という言葉一つをとっても、イタリア語でどう訳すればいいのか難しいところ。国によって解釈も違うし内容も違います。ある国では「日本学」という言葉自体が嫌われ、ある国ではあたりまえのように使われていたりします。用語の解釈にこだわることが重要ではないと思います。

高橋 「21世紀のシボルト養成プログラム」の時も、シボルトと付けなければいけないの意味合いは分かってもらえるのじゃないかと考えました。シボルトのような学生を迎えたい、育てたいと言え、細かい説明なしでイメージしてもらえたのではないかと感じています。

尾崎 だから、三大学シンポジウムでも①「ヨーロッパから見た日本」、②「身体性をめぐって」、「③[Disciplines Meeting]とタイトルについて、「日本学」という言葉を使っていません。また、フィレンツェのシンポジウムでも、「学びの作法」対象としての「ラボン」、方法としての「ラボン」とする予定で、「日本学」とはしていません。

高橋 イメージが限定されてしまわないように注意することで、内外のいろいろな分野の研究者がコミットでき、世界各地から学生が集まり、交流しながら高め合っていくようにしようというのが、この大学院の目標です。

尾崎 日本というのがベースにありながらも、世界のためになるんだということで、非常に意欲の高い人が国内外から集まり、育って行ってくれることを狙っているわけです。

高橋 いわば、たくさんさんのフォンガロ先生をつくりたい、仙台を国際交流の拠点にしたいと言っ

てもよいでしょう。10人くらいの定員でスタート予定ですが、10人のフォンガロさんが集まったら驚異的なクラスになりますよ。

フォンガロ 私が教えているイタリア語授業受講者の中では海外留学に関心を持っている学生もいますが、日本から世界へ出て行ってチャレンジするところには迷いがあるように感じられます。高いポテンシャルがあるのに非常に残念だという学生が少なくありません。しかし、この大学院がスタートし、文学部のキャンパスに留学生が増えれば、刺激を受け、じゃあ自分も出ていって勉強しようと思える機会も増えてくるでしょう。

高橋 例えば留学生のためのチューターをしたりすれば、それだけでも力がつくので、留学してみようかなと考える学生も増えるはずなのです。実際にチューターをしたことによって、海外に行つて何かやってみようと思ひ、現在留学中だという日本思想史研究室の学生もいます。

尾崎 ある大学のある先生のところから学生が留学してきたということになれば、先生同士のつながりも太くなります。また、留学生が卒業を終えて帰国すれば、帰国したところにつながるの場所ができます。日本人の学生が留学してみようと思ひたとき、「ぜひ来てください、私が案内します」という関係になることも考えられるでしょう。

フォンガロ 留学生同士の交流が広がれば、安心感が大きくなっていきますね。

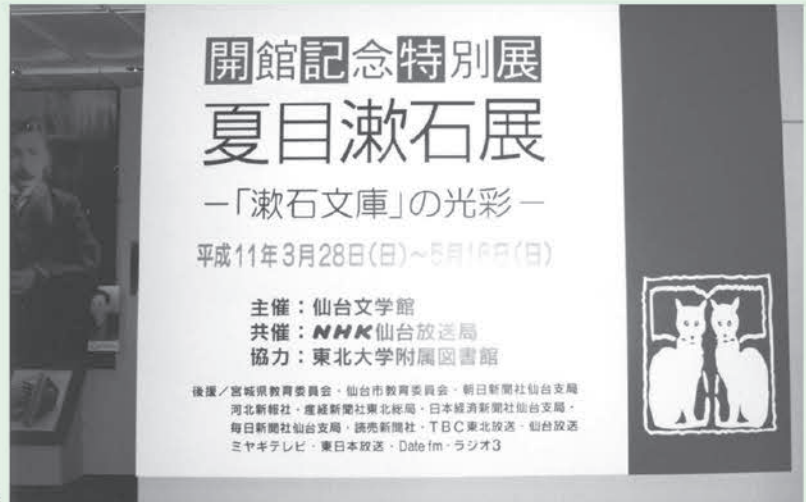
高橋 といったところで、「応のしめくり」として、これからの進展に期待しましょう。

仙台文学館との対話

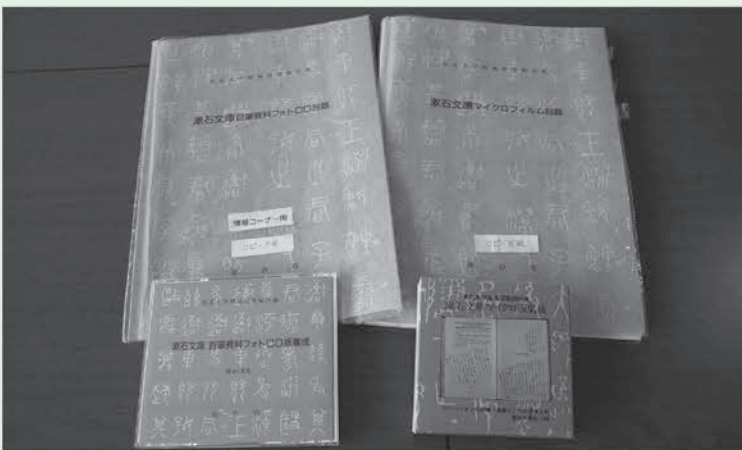
開館記念特別展以来の深いおつきあい



1999年の萩原忠雄名誉教授



1999年の夏目漱石展



文学館の開館に先立ち、1995年(平成7年)度から、東北大学図書館と仙台市が連携。「漱石文庫」の膨大な資料のマイクロフィルム化に着手し、1997年(平成9)度末に完了しました。

そして1999年3月5日、そのような実績も踏まえながら、開館記念イベントとして「夏目漱石展」「漱石文庫」の光彩」が開かれたのです。東北大学関係者の出演はありませんでしたが、記念講演、シンポジウム、ゼミナール、文学対談などで盛り上がりしました。



また、「漱石文庫」のマイクロフィルムは、東北大学図書館と文学館とで利用できるようになりました。現在では、CD利用も可能になり、一段と便利になっています。

「漱石文庫」のマイクロフィルム化という連携

仙台文学館(以下、文学館と略称)は、「郷土ゆかりの文学に関する資料を収集保存するとともに、地域の文学活動の拠点となること」をコンセプトに、1999年(平成11)3月に開館した仙台市の施設です。

1999年の開館時には、開館記念として東北大学附属図書館(以下、東北大学図書館と略称)で所蔵する「漱石文庫」特別展とイベントが行われました。開館記念特別展Part 2「みやぎの杜の文学者たち」では、萩原忠雄名誉教授の記念講演もありました。最新の特別展(2015年4-6月)では、「どくとるマンボウの生涯」のタイトルで北杜夫(医学部卒。故人)展が行われました。

また2007年から始まった「仙台文学館ゼミナール」には、東北大学文学部の研究者が講師として招かれています。相談があれば研究のあいまをぬって応対し、イベントにも参加するなど、文学部をはじめとする東北大学の対応は目覚ましいものがあります。文学館と東北大学には強い絆があるのです。

東北大学創立100周年時の「漱石展」

2007年、東北大学は創立100周年を迎えました。その時、文学館では、再度、東北大学との連携を計画。2008年3月5日、「学都に息づく夏目漱石の精神」と題した展示イベントを実施し、東北大学図書館の「漱石文庫」の展示を行いました。

このイベントでは、菊田茂男名誉教授（国文学）、阿野文明名誉教授（アメリカ文学）、仁平道明教授（国文学）、原英二教授（英文学比較文学）、佐藤伸宏教授（国文学）が文学サロンに出演し、東北大学図書館職員・木戸浦豊和が「漱石文庫」の資料解説を行いました。

■2008年「文学サロン」の東北大学関係者

菊田茂男名誉教授	漱石と鷗外	原 英二教授	夏目金之助先生の英文学
阿野文明名誉教授	夏目漱石とアメリカ文学	佐藤伸宏教授	「永日小品」のなかの＜ロンドン＞
仁平道明教授	さびしい『坊っちゃん』		



2008年の「漱石展」のチラシ



仁平教授の文学サロン



原教授の文学サロン

「仙台文学館ゼミナール」で文学部研究者の協力

この2007年には、現在、文学館の定期的イベントの柱となっている「仙台文学館ゼミナール」が始まりました。

「近代文学を読み解くコース」（6～12月開催）では、2007年のスタートで大学院文学研究科出身の虫明美喜氏が「樋口葉を読む」を講義した後は、2008年から教育学部卒の佐藤通雅氏が宮沢賢治の童話、『銀河鉄道の

夜』（注文の多い料理店）、「鹿踊りのはじまり」と「セロ弾きのゴーシュ」、「グスコップドリの伝記」、「風の又三郎」、「ボラーノの広場」を底本に講座を開いています。

そして「日本の古典に親しむコース」（9～3月に開催）では、文学部の研究者が中心になって講義等を行っており、左記のように続いています。

■「仙台文学館ゼミナール」の日本の古典に親しむコース

2007年	出演なし
2008年	佐倉由泰文学部准教授（当時）『平家物語』を読む
2009年	佐倉由泰文学部准教授（当時）『平家物語』を読む
2010年	佐倉由泰文学部教授『平家物語』を読む
2011年	星山健氏（文学部卒・文学研究科修了）『更科日記』の世界 佐倉由泰文学部教授『平家物語』を読む
2012年	佐倉由泰文学部教授「藤原清衡と文学」
2013年	佐倉由泰文学部教授「義経記」の世界 久保堅一氏（文学部卒・文学研究科修了）『源氏物語』に親しむ
2014年	津田大樹氏（文学部卒・文学研究科修了）『万葉集』を味わう 横溝博文学部教准授「清少納言『枕草子』を読む」
2015年	横溝博文学部教准授『紫式部日記』を読む 津田大樹氏（文学部卒・文学研究科修了）『万葉集』を味わう



2014年、横溝准教授のゼミナール

「東北帝国大学の教授たちとブルーノ・タウトに関する資料」 特集コーナーに文学部関係者

開館当初の常設展には「仙台ゆかりの文学者たち」と名づけられたコーナーがあり、法文学部教員の阿部次郎（美学・西洋美術史）、小宮豊隆（ドイツ文学）など、仙台を舞台に全国的な文学活動を展開した研究者たちが紹介されてきました。近年のリニューアルにより規模は小さくなりましたが、「学都仙台とその文学」として展示が続けられています。

2014年9月から本年6月末まで、「東北帝国大学の教授たちとブルーノ・タウトに関する資料」が紹介されていました。

明治・大正・昭和初期の時代、東北帝国大学



「仙台ゆかりの文学者たち」常設展コーナー

に集った研究者たちの中で、文学に造詣の深い人々が書画会や俳諧研究などのサロンを開いて交流していました。1933年にナチスの迫害から逃れて来日したドイツ人建築家ブルーノ・タウトは、1934年に来仙して工芸指導所の指導者となると、翌年離仙するまでのサロンに参加していたのです。

この時の交流を紹介した展示には、法文学部教員であった阿部次郎、小宮豊隆、武内義雄（中国思想・中国哲学）、児島喜久雄（西洋美術史）をはじめ、木下杢太郎（医学）、熊谷岱蔵（医学）、勝本正晃（法学）の名が見られます。



「東北帝国大学の教授たちとブルーノ・タウトに関する資料」特集コーナー

「情報コーナー」に文学部関係者の著作

仙台文学館2階には「情報コーナー」があり、「直木賞」をはじめとして各種文学賞を受賞した仙台・宮城ゆかりの文学者の著作類が配架されています（書庫には、展示品以外の作品も収蔵されています）。

東北大学関係者は下記のような状況です。



情報コーナー

「もっと文学館を利用してほしい」とのメッセージ

ちなみに、これらの内容を話していただいた主任学芸員渡部直子さんは、東北大学文学部出身です。ほかにも何人か東北大学出身者がいるそうです。

仙台文学館には、文学関係の情報に関して、東北大学附属図書館とは異なった、よりポピュ

その一人である大池唯雄氏は、東北大学法文学部を中途退学した後、文学者へと転身し、大佛次郎に師事して東北最初の直木賞作家となりました（1939年）。仙台文学館の小池光館長は、その子息であり、東北大学理理学部卒の歌人として有名です。

■展示室情報コーナーの東北大学出身者（五十音順）

伊坂幸太郎	法学部卒	山本周五郎賞ほか
大池唯雄	法文学部中退	直木賞ほか
北杜夫	医学部卒	芥川賞ほか
小池光	理学部卒	迢空賞ほか
高城高	文学部卒	『宝石』懸賞小説入選
佐藤賢一	文学研究科修了	直木賞ほか
瀬名秀明	薬学部卒・薬学研究科修了	日本SF大賞ほか
中村彰彦	文学部卒	直木賞ほか

ラーな内容があります。「漱石文庫」のマイクロフィルムやCDも利用できます。

「東北大学附属図書館とは違った趣のある仙台文学館を、もっと学生さんたちにも利用してほしい」と、渡部さんは結びました。

東北大学文学部の

歴代研究者
メモリアル 10



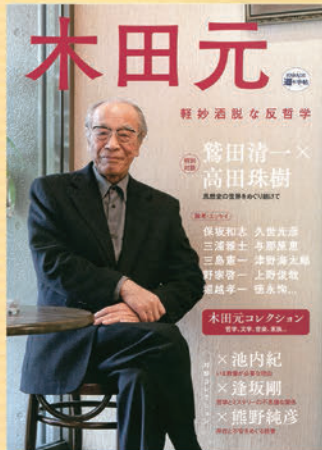
日本の“現象学”研究の基礎を
築いた哲学者

高橋里美博士

Satomi Takahashi

(1886-1964。哲学。東北大学文学部在職1923-48、東北大学学長1949-57)

写真は東北大学史料館「東北大学関係写真データベース」より



(河出書房新社「KAWADE道の手帖」)

2014年8月、東北大学文学部卒業・文学研究科修士課程生であり、また助手・講師として在職した(1958-60)経歴を持つ哲学者・木田元氏(1928-2014)が死去。12月には、河出書房新社の「KAWADE道の手帖」から、追悼特集とも言える『木田元軽妙洒脱な反哲学』が発行されました。

その巻頭に置かれた鷺田清一・高田珠樹の特別対談において、東北大学文学部の哲学研究について鷺田氏が次のように発言しています。

私は京都大学の学部時代にフッサールとメルロ＝ポンティの勉強を開始したけれど、当時の京大にはそういう関係の先生もおられませんでしたし、現象学はやはり東北大学がメッカでした。滝浦静雄さんがいらっやっしたし、卒業生には木田さんや新田義弘さんがいらした。この三人の先生が、のちに京大教授にもなられた三宅剛一先生です。三宅先生よりさらに一世代上の、西田幾太郎批判でデビューした高橋里美先生は、戦前、フッサールの講義を直接聞いて論文を書いていたわけですから、フッサール研究でも、東北大学が群を抜いていたんです。

ここに記された高橋里美先生とは、東北大学法文学部哲学第一講座(近世哲学史)の初代教授であり、後には9代東北大学学長ともなった高橋里美博士です。第二代以後の教授は三宅剛一(1895-1982。文学部在職1924-54)以下、細谷恒夫(履歴略)、細谷貞雄(履歴略)、柏原啓一(履歴略)となっています。

熊野純彦氏(文学部助教授在職1996-99)の編著『日本哲学小史』には、〈三宅は岡山の第六高等学校で高橋里美からドイツ語を教わっている。高橋が東北帝国大学理学部の「科学概論」担当となったとき、高橋のあとを襲って新潟高校に赴任、さらに高橋が法文学部に配置替えとなったさい、高橋の講義していた「科学概論」担当者となって仙台へと居を移した。〉と記され、高橋と三宅の関係、そして当時の東北大学における哲学研究の系譜と高橋博士の日本哲学におけるポジションなどについても触れられています。

博士の業績はほとんどが絶版書であり、図書館に並ぶ『高橋里美全集』全7巻などで見るほかありません。しかし今、フッサールについての研究をまとめた『全体性の現象学』は燈影舎「京都哲学撰書」の1冊として購入し、ベルグソンの代表的著作を翻訳した『物質と記憶』の岩波文庫1996年改訂版はネットの古書購入によって、じっくりと読むことができます。

Profile

1886年、山形県米沢市生まれ
1921年、東北大学理学部助教授
1923年、法文学部助教授
1925-27年、ドイツ留学。
リッケルト、フッサールに学ぶ
1928年、法文学部教授(～48年)
1949年、東北大学学長(～57年)



東北大学史料館「東北大学関係写真データベース」には
何点か写真が残っている

現象学研究、 フッサール研究の成果

高橋博士は、1925〜27年の
期間、ドイツに留学。リッケルト
(1863-1936、哲学者)、
フッサール(高橋博士はフッサールと表
記。1859-1928、哲学者、
数学者)に師事し、ドイツ語、哲学
等を研修しました。

その成果は、帰国後の研鑽も加
えて、1931年、『フッサールの現象
学』にまとめられ第二書房より発行
されました。その「序」において、博
士は、フッサールについて、フッサール
から学んだことについて次のように
記しています。

現象学の創設者、エドムントフッサール(Edmund Husserl)の偉大
なる名に憧れて、「フライブルク詣」をしたのも、今は早や数年の過去で
ある。彼の許に遇った、一九二六年の秋から、翌年の夏にかけての二学
期は、私にとつては種々の点で意義深きものであった。例えば、親しく彼
の講義や談話などをきいて、いわゆる現象学なるものは、私が日本にあつ
て、彼の著書や、彼についての紹介などを通して想像していたものとは、そ
の主張において、殊にその動機において、かなりに違つたものだということ
を覚つたこともその一つである。また哲学は結局、体験の事実を度外視す
ることができないということ、いわゆる「事物に即すべき」ことを、ますま
す深く感銘させられたこともまたその一つである。しかし、私を何より
も強く感動せしめたものは、彼が現象学を彼の一生の、また唯一の事業と
して、これが研究に心身を捧げ尽くし、しかも一個の学的労働者に甘ん
じ、かつそれをもつて任じている真摯な学者的態度であつた。その当時のこ
とを偲ぶとき、私の心は常に彼に對する深き尊敬と感謝の念をもつて満
たさるるを覚ゆる。



そして、続けて『フッサールの現象
学』の内容について、次のように記し
ています。

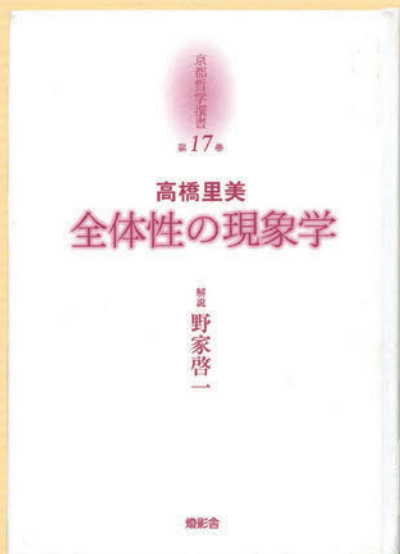
フッサールは、1926-27年の冬学
期に、『現象学入門』(Einführung
in die Phänomenologie)を講
義し、ほかにまた現象学の演習を講
行ない、次の夏学期には、「自然と
精神」(Natur und Geist)の講
義と、「カントの純粹理性批判」の
演習をなした。この書は私にとつて
は、その時の記念ともいふべきもの
である。本書の目的は、彼の現象
学を、私の立場から批判すること
ではなくして、私の理解した限り
において、それをなるべく忠実に紹
介することにある。

いま本書は、野家啓一名誉教授
(哲学)の解説により、「京都哲学
撰書」の二冊となつて購読できるよ
うになつてゐるのです。野家氏は、
『全体性の現象学』に付した解説

〈「全体性の現象学」への道〉におい
て、次のように書き出しています。

高橋里美は西田幾多郎、田辺
元、九鬼周造らと並んで、近代日
本哲学の黎明期を代表する哲学
者の一人である。(中略)

高橋里美の哲学的業績は、大き
く三つの部類に分けることができ
る。第一はフッサール現象学の日本
への導入者として果たした役割で
あり、処女作『フッサールの現象学』
および現象学関係の論考数編が
それに当たる。第二は『全体の立
場』から『包摂証法』にいたる著作
において展開された、「高橋哲学」
と呼ばれる体系的哲学の構築であ
る。第三は、先に述べた西田哲学に
對する批判者としての役割にほか
ならない。これらの先駆的業績を
通じて、高橋の哲学は近代日本哲
学の中にゆるぎない地歩を占めて
きたのである。(後略)





『高橋里美全集』全7巻
(仙台市民図書館所蔵本より)

■仙台市内の図書館で見られる

高橋里美の著作

(東：東北大学、宮：宮城県図書館、
仙：仙台市民図書館)

現代の哲学	1917年(東、宮)
全体の立場	1932年、69年(東、宮)
認識論(上・下)	1931年(東)
フッサルの現象学	1931年(東)
ヘーゲル哲学概論	1932年共訳(東)
時間論	1933年、1953年(東、宮)
体験と存在	1936年、69年(東)
認識論	1938年、69年、73年(東、宮)
歴史と辯證法	1939年、69年(東、宮)
包辯證法	1942年、47年(東、宮)
哲学の本質	1947年、68年(東、宮)
私の哲学と人生観	1951年(東)
人生と宗教	1963年(東、宮)
哲学概論	1972年(東)
高橋里美全集 第1巻(哲学論および体系論)	1973年(東、宮、仙)
高橋里美全集 第2巻(認識の問題)	1973年(東、宮、仙)
高橋里美全集 第3巻(時間・歴史および弁証法)	1973年(東、宮、仙)
高橋里美全集 第4巻(フッサルの現象学および現代日本の体系哲学について)	1973年(東、宮、仙)
高橋里美全集 第5巻(宗教・人生・文化)	1973年(東、宮、仙)
高橋里美全集 第6巻(初期の著作、ほか)	1973年(東、宮、仙)
高橋里美全集第7巻(小品・随想・その他)	1973年(東、宮、仙)
全体性の現象学	2010年(東)



ベルグソン『物質と記憶』の 初訳という成果

これに先駆けて高橋博士は、1914年に東京星文館からベルグソンの『物質と記憶』の初訳を出版しました。1936年には改訳して岩波文庫から出版したことにより入手しやすくなり、1996年の改訂版は現在でもネット上で購入できる古書となっています。

『物質と記憶』は、その後、田島節夫訳(白水社/1965年・99年)、岡部聡夫訳(駿河台出版社/1995年)、合田正人・松本力訳(ちくま学芸文庫/2007年)と続きましたが、高橋訳と最新訳の目次を比較してみると、「形像」と「イメージ」など用語の表現に若干の変化は見られるものの、高橋訳がほとんど生かされた形となっています。1914年の初訳の際、西田幾太郎(1870-1945)日本の

哲学の創始者」が「序」を書き、

余は高橋君が周匝なる注意を以て、この難解の書を譯せられた勞を多とするのである。オイケン、ベルグソンといえは今更に紹介の要なきまでに、我國に喧傳せられては居るが、自分でこの両哲學者の著書を読んで、之を味つた人は幾人あるであらうか。嘗て我國に「チヂキ」が傳へられた時、その名の噴々たることは今のオイケン、ベルグソンに譲らなかつた、併し「ツアラトウストラ如是説」をその當時讀んだ人は幾人あつたであらうか。余は切に力量ある學者の忠實な翻譯によつて、オイケン、ベルグソンが一時の流行に終らずして、深く我國思想界の血となり肉とならんことを望むものである。と記しています。

高橋博士のベルグソン初訳は、時代が求めていたものの、高橋博士だからこそのタイムリーな回答だったと言えるでしょう。

■『物質と記憶』の翻訳本の比較(第一章・第二章の比較)

高橋里美訳(1936年)	合田正人・松本力訳(2007年)
第一章 表象作用のためにする形像の選擇に就いて 身體の職能 現實的作用と可能的作用 表象 實在論と觀念論 形像の選擇 表象の動作に対する關係 形像と實在 形像と感情的感覺 感情的感覺の本質 感覺を雜へざる形像 形像本来の延長 純粹知覺 物質の問題への推移 記憶の問題への推移 物質と記憶	第一章 表象に向けてのイメージの選擇について -身體の役割 現實的作用と可能的作用 表象 實在論と觀念論 イメージの選擇 表象の行動に対する關係 イメージと實在 イメージと感情的感覺 感情的感覺の本質 感情的感覺から切り離されたイメージ イメージ本来の伸張性 純粹知覺 物質の問題への推移 記憶の問題への推移 物質と記憶
第二章 形像の再認識に就いて 記憶の二形式 運動と記憶 記憶と運動 記憶の実現	第二章 イメージの再認について-記憶と脳 記憶の二つの形式 運動と想起 想起と運動 想起の現實化



山形県立図書館縣人文庫

山形県立図書館 「縣人文庫」の中の高橋博士

ちなみに、高橋博士は山形県米沢市の出身です。

冒頭に紹介した木田元氏は新潟市出身ですが、戦後、満州から帰国して母の実家である鶴岡市に住んでいました。氏は、『闇屋になりそこねた哲学者』（2010年／ちくま文庫）において、東北大学法文学部に入学して出会った高橋博士について、次のように記しています。

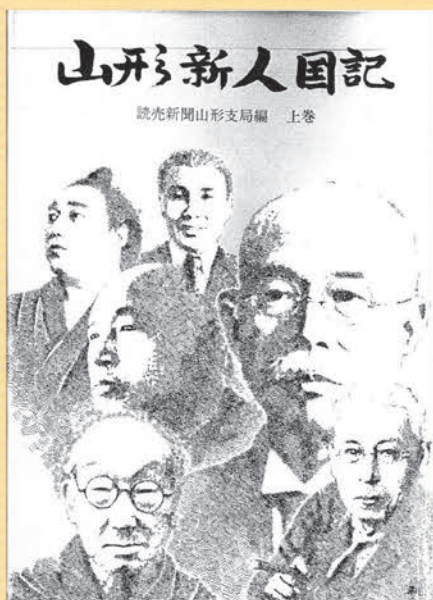
東北大学の哲学科はテキストをきちんと読む訓練をしてくれるところでした。高橋里美さんという、ドイツに留学してフツサルに学び、のちに東北大学の学長になった先生が、ドイツ語のテキストをひどく厳密に読む人だったので、そうした伝統ができたようです。高橋さんは、米沢の出身で、日本語はすごいズーズー弁でしたが。

山形県では、山形県立図書館が「縣人文庫」を開設して山形県出身の著名人22人の業績を顕彰していますが、その一人として高橋里美博士に関する資料も整備されています。

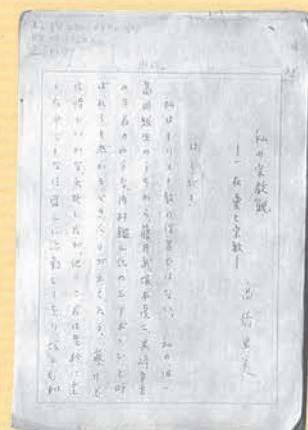
東北大学図書館にある単行

本著作のほとんどが揃えられているほか、他の単行本や雑誌に発表した論文もまとめられ、博士の業績を多面的に検索することができます。

『山形新人国記』（上・下巻／読売新聞山形支局）という本には、この文庫に収められた22人を含む63人の山形県人が紹介されていますが、博士については「西田、田辺と並ぶ哲学者」の見出しで、〈西田幾太郎、田辺元、高橋里美。独自の哲学体系を打ち出したという意味で、哲学界では、この三人を「古典哲学の三巨人」と呼ぶらしい。〉と書き出されています。同書によれば、山形大学図書館に博士が寄贈した約三千冊の「高橋文庫」が残されているとのこと。



『山形新人国記』の表紙



山形県立図書館縣人文庫所蔵
「私の宗教観」の原稿



山形県立図書館縣人文庫所蔵 著書

日本の仏教美術研究のフィールドで

『日本美術全集』への参加というエポック

2012年12月、東北大学文学研究科東洋日本美術史専攻分野・泉武夫教授と辻惟雄氏（元文学研究科教授）が編集委員の1員となつて『日本美術全集』（全20巻／小学館）が刊行開始され、今も出版が続いています。

東北大学文学研究科・文学部関係者では長岡龍作教授（第2巻）、泉教授（第5・11巻）、安村敏信氏（文学研究科修了）（第13巻）、辻氏（第14巻）が責任編集として参画。シリーズの第1回配本となつた第2巻を責任編集した長岡教授が、「はじめに」で、次のように記しています。

この巻では、日本の美術の黎明期を対象とする。ここで取り上げる美術のほとんどは仏教美術である。つまり、日本における美術の誕生には、仏教の受容という背景が明確にあった。

（中略）

美術の黎明期を取り扱う本巻は、日本において仏教が受容されてゆく過程を時代ごとに追

うことになる。そのためには、まず法隆寺の美術について十分に理解を深めたい。法隆寺は造形の総合的な集積地であるから、本巻は、建築史や考古学など、美術史以外の研究者の協力を仰ぎ、その世界を把握することに努めている。

そのうえで、ほかの地域、ほかの時代へと関心を移してゆこう。日本仏教の発祥の地は飛鳥であり、藤原京、平城京とその舞台は移つてゆく。蘇我氏の飛鳥寺、のちに大安寺となる皇極天皇（斉明天皇）の百済大寺、そして天武・持統天皇の薬師寺がこの時代の主要な寺院であるが、平城京に移された薬師寺に仏像が遺る以外は、残念ながら遺品は多くはない。地方に遺る仏像も取り上げながら、この時代の美術を振り返りたい。

本巻で長岡教授は、607年に建立されたと伝えられる法隆寺（奈良県）を中心に、その周辺の寺院の仏教

美術に迫っています。

これと前後して教授は、多彩な論考を発表しています。書店での購入、図書館での閲覧が可能な代表的な著作（次ページ参照）を通して、日本仏教美術を代表する仏像に関する長岡教授の研究に分け入ってみましょう。

『日本美術全集』への文学部・文学研究科関係者の参加

第2巻「法隆寺と奈良の寺院」

長岡龍作（文学研究科教授）責任編集

第5巻「王朝絵巻と貴族のいとなみ」

第11巻「信仰と美術」

泉武夫（文学研究科教授）責任編集

第13巻「宗達・光琳と桂離宮」

安村敏信（文学研究科修了）責任編集

第14巻「若冲・応挙、みやこの奇想」

辻惟雄（元文学研究科教授）責任編集

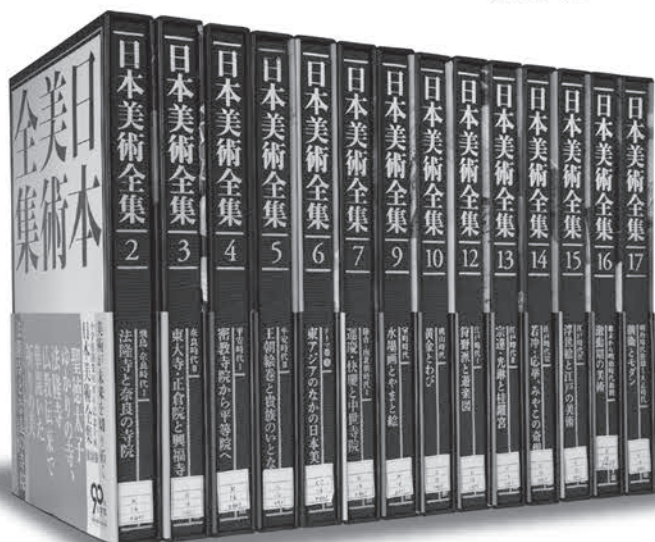


東洋・日本美術史
長岡 龍作教授

Nagaoka Ryusaku

Profile

1960年、青森県生まれ、札幌市育ち。東北大学文学部卒業、文学研究科博士課程前期課程修了。東北大学文学部助手、東京国立文化財研究所主任研究官、東北大学文学研究科助教授を経て、2004年に現職。研究分野は「東洋日本美術史（仏教美術史）」、研究課題は「古代日本の信仰と造形」。



はじめに…仏教美術研究へのステップ

長岡教授は、高校時代、和辻哲郎『古寺巡礼』や亀井勝一郎『大和古寺風物詩』から古代の仏像への憧れを抱き、柳田国男『遠野物語』から民俗学への関心を持ち、日本の古い文化、特に美術を勉強したいと考えるようになり、決定的だったのは、奈良への修学旅行で法隆寺・中宮寺を訪問、中宮寺菩薩半跏像の美しさに感銘したことでした。

東北大学文学部へ進学し、3年次の専攻選択で「東洋日本美術史(東日美)」分野へ。飛鳥時代の仏像を中心とした講義から平安初期の木彫像の造形力に惹かれていき、卒論では法華寺(奈良県。745年創建)の十二面観音像についてまとめました。この像は、法隆寺夢殿救世観音、法隆寺金堂釈迦三尊像、神護寺薬師如来像、雲岡石窟と共に、教授の「わが生涯ベスト5の仏像」といふことです。



十一面観音像 宝積院(山形県)
(写真提供:東北歴史博物館)

をテーマにして修士論文に取り組み、山形市の宝積院十二面観音像を取り上げて、中国から日本への図像の伝播について考察しました。

そして博士課程1年時の1985年には中国をトルファンから香港まで旅し、「仏像を本来それがあつた場所において考える」という方法論への問題意識を持ち始めました。

初めに惹かれた仏像が、なぜ十二面観音像だったのか。まずそれは美作だったからだそうです。

教授は、次のように説明します。十二面観音の頂上には如来面があります。つまり、十二面観音は、菩薩の像の中に如来が含まれているという特徴ある仏像なのです。如来の出現を願っている人びとが祈り、期待している形がそこに表現されています。

形は人々の信仰の中から産まれてくる。だから、形を読むことで、像の前で人びとがどの

ようなことを願っていたのかが分かっていく。仏教伝来の地である奈良から地方へどう広がって行ったのか、ある仏像がどう伝わって行ったのかといった影響関係からだけでなく、それぞれの場所での人間の祈りの営みへと

教授の関心は向かいました。仏像と人間はどのように向き合っているのか、人間の精神と仏像の関係を各時代、各地域に応じて考えようと進んでいきました。

■長岡教授の主な著作・編著書・執筆

- ①『朝日百科 日本の国宝 別冊 国宝と歴史の旅3』(執筆): 1999年12月、朝日新聞出版
執筆部分: 旅のはじめに／神護寺・薬師如来像再論-神護寺と東寺-それぞれの頭密
- ②『講座日本美術史 第四巻 造形の場』(編著): 2005年9月、東京大学出版会
執筆部分: 〈序〉「造形の場」／〈第1章 造形の居場所〉「仏像をめぐるいとなみ」
- ③『日本の仏像 飛鳥・白鳳・天平の祈りと美』(単著): 2009年3月、中公新書
飛鳥・白鳳・天平時代(7〜8世紀)の仏像について、人間を主語に読みとく
- ④『日本美術全集2 飛鳥・奈良時代I』(編著): 2012年12月、小学館
執筆部分: はじめに／法隆寺-美術と祈り／古代日本の祈りと美術
- ⑤『日本文化 私の最新講義 仏像-祈りと風景』(単著): 2014年1月、敬文舎
奈良時代〜平安時代(8〜11世紀)の仏像について、風景の中の祈りとともに読みとく
- ⑥『仏教美術論集5 機能論-つくる・つかう・つたえる』(編著): 2014年4月、竹林舎
執筆部分: はじめに／〈美術の宗教的効果〉蓮華蔵世界と正倉院の屏風／あとがき

1. 神護寺という場

— 1999年、『朝日百科 日本の国宝 別冊 国宝と歴史の旅3』の執筆

一般に読むことができる著述の第一歩と言えるものは、『朝日百科 日本の国宝 別冊 国宝と歴史の旅3 神護寺 薬師如来像の世界』(1999年、朝日新聞出版)です。

東京国立文化財研究所主任研究官であった教授は、「旅のはじめに」のタイトルで

仏像には居場所がある。これが、これから始まる旅の前提だ。では、「像」の居場所とはどう

いうものだろうか。この問題は、仏像とは何かという問いかけと深く関わっている。と書きました。

以下、平安遷都(794年)の頃、平安京の西北に位置する高雄山中に創建され、高雄山寺から神護国祚真言寺と名を変えてきた古代寺院神護寺(京都府)を、都にある「官寺」とは異なる、山にある「山寺」の代表として選定。

良質の力(権)でつくられた金堂薬師如来立像を取り上げ、さらに東寺(教王護国寺、京都府、796年建立)、京都府・滋賀県・大阪府・奈良県の七高山(比叡山、比良山、伊吹山、神峯山、愛宕山、金峯山、葛城山)などの薬師如来像に注目して、仏像の居場所についての論考を進めています。そして、

(前略)平地寺院と山寺は、古代仏教において、それぞれに意味を振り分けて、二つながら必要とされた場だった。仏像は、それぞれの場の文脈に沿って造立されたのだ。それが、それぞれに薬師のネットワークが形成された理由だ。

山寺に必要な像は、神護寺薬師如来像のような、原材料の材質を感に表面に残し、彩色を極力限った清浄性を持ち、森厳な相貌と力強い彫り口の衣文線によって、深い精神性をあら

わすものだったはずだ。像は、山寺を必要とした僧侶、つまり浄行僧に向かい、「場」をつくり、儀礼の効果あげた。威厳ある相貌は、浄行僧の集う場を支配する。そして、像が左腕を曲げ持物を持つて立つ姿に彼らは、行道する自身の姿を見たのではないか。あるいは、神護寺像の右手にかかる横被は僧形像に多く見られるように法衣であつて、むしろ彼ら自身の着衣を象徴したのではないか。(後略)

と「場」と「仏像」の関係についてまとめています。



2. 仏像をめぐるいとなみ

— 2005年、『講座 日本美術史4 造形の場』の編集

数年後、教授は、日本美術史研究の学術的成果をまとめる『講座 日本美術史』(東京大学出版会、全6巻、2005年4月~11月)の刊行に参画。第4巻『造形の場』の編集責任者となりました。

その「序 造形の場」「美術」はいかに人間と関わったかにおいて、

「造形の場」という視点から美術を考えると、いつとどこで、いつとどこか。本巻の試みは、造形それ自体を注視しながらも、造形が生成さ

れ受容される場、いかにあると造形の置かれる環境にも眼を向け、造形の成り立ち方あるいは美術の社会的・歴史的なあり方を問おうというものだ。(後略)

と主張。以下、第1章「造形の居場所」において「仏像をめぐるいとなみ——上代法隆寺を場として考える——」のタイトルのもと、607年に建立され、聖徳太子が用命天皇のために金銅薬師如来像を造立したと伝えられる法隆寺について執筆。30ページにわたって、金堂釈迦

三尊像や伝橘夫人念持仏厨子を中心とする仏像、「法隆寺資材帳」・「東院資材帳」などの資料をもとに、光背銘の意味、仏像の伝承等について論述しています。

この論考は、前述した『神護寺薬師如来像の世界』より約200年前、仏教伝来初期の



時代にさかのぼるものとなっています。そして教授は、

法隆寺という場における、仏像のあり方を概観した。仏像をめぐるこの論考の中で、考察の素材としたのは、銘文、記録、しつらえである。これらはいずれも、仏像本体を取り巻いている、二次的な事象群と位置づけられるかもしれない。しかし、これらの素材は、造立から伝承へとその状態を変化させてゆく、各々の段階における仏像のあり方を我々に直に伝えるものである。このような素材に着目することで、それぞれの時代における人々の仏像との向き合い方を知ることができるといってよいだろう。とまとめています。人間と美術の関わりを時代、空間、社会、コミュニティなどの「場」において捉えてみようとする新しい試みです。



釈迦三尊像 法隆寺金堂

3. 祈りと仏像

— 2009年、『日本の仏像 飛鳥・白鳳・天平の祈りと美』で法隆寺以後へ

法隆寺までさかのぼった教授には、改めて仏教美術とは何かという基本的な問いかけから、その答えを一般化していくという思いも強まりました。それを新書というパブリックなものにまとめたのが『日本の仏像 飛鳥・白鳳・天平の祈りと美』（中公新書、2009年）です。

「まえがき」において、教授は、

日本には、古代や中世の人々がエネルギーを傾けて造った仏像が多数遺っている。お寺で、あるいは展覧会で、そのような仏像に親しむ機会も多いだろう。展覧会での仏像はその美しさが鑑賞される。この場の仏像は美術といっている。一方で、美術史を専攻する私たちが仏像を研究対象とするとき、仏像は美術ではないという言い方で批判を受けることもある。もちろんそこには仏像は信仰の対象なのだからという意味が込められている。では美術と信仰

の対象という二つの見方は相反するものなのだろうか？

と問いかけ、すぐに続けて、

美術という見方が仏像が造られた時代にはなかったのももちろんだ。しかし、美術とは何かをつきつめてゆくと、人間が「何か」を眼に見えるかたちに表示したものとして定義できる。この

「何か」に相当する部分には、信仰だったり、風景だったり、人間の内面だったりという具合にいろいろなものが入ってくる。「表現」を英語にする「representation」となるが、イギリスで活躍した美術史家、E.ゴンブリッチ（一九〇九—二〇〇二）は「representation」という言葉こそが美術（芸術）の重要な役割を示すと論じてい

る。ゴンブリッチの考え方によれば、「representation」には二つの側面がある。一つは「描写」であり、もう一つは「代替」だ。つまり、美術とは何かを描いたものであるということに加えて、何かの替わりになるものとすることもできる。と説明。そして、

そこで思い当るのは、仏像はけっして仏そのものではないということである。少なくとも古代の人々はそのように見ていない。本来は見ることでできない仏を「描写」し現世に再現することが、仏像を造るときに彼らの基本的な動機だ。それはまた仏像を、仏の「代替」とみなすことでもある。このことに思い至ると、仏像とは間違いなく「representation」であるという

ことができる。

と結論つけて、本文へと進んでいます。

序章、終章を含めて9章構成となっている本文では、法隆寺からさらに薬師寺、大安寺、法華寺、四天王寺、飛鳥寺、国分寺などと場所も時代も広がり、仏像と信仰の関わりが究められています。第七章では、「女性たちの仏像」という項も設け、光明皇后が聖徳太子への帰依の心を示すために法隆寺金堂釈迦三尊像に祈りを捧げたことを取り上げ、さらには、光明皇后を偲ぶ人々が法華寺に十二面観音像を造立したという伝説も取り上げて女性たちの信仰活動に触れた上で、

仏像は祈りのためにある。祈りの心を喚起するのが仏像の役割だ。深い信心を仏像へ寄せするために会いたい人の姿をそこに重ね、それは釈迦への篤い思慕が仏像を造らせたという、仏像の始まりの物語と同じ心によるものだ。と締め括っています。



■『日本の仏像 飛鳥・白鳳・天平の祈りと美』の目次

序章	仏像を造るとはどうか 聖徳太子のために造られた仏像
第一章	(一) 造像 (二) 表現と荘厳 (三) 止利仏師の意味 生身という思想
第二章	(一) 仏像と「生身」 (二) 釈迦はどこにいる？ (三) 薬師寺金堂薬師如来像 (四) 大安寺釈迦を写す
第三章	釈迦に出会う (一) 須弥山 (二) 須弥山から靈鷲山へ (三) 到彼岸への道のり
第四章	仏はどこにいる (一) 釈迦のいる場所 (二) 薬師のいる場所 (三) かたちのない真理—山水の中の釈迦
第五章	天の働き (一) 日本古来の天—天神地祇 (二) 四天王寺と飛鳥寺 (三) 天とおこない
第六章	国土を法界にする (一) 蓮華蔵世界—大仏と国分寺 (二) 保証し懲罰する天 (三) 護国と罪
第七章	救済のかたちと場所 (一) 女性たちの仏像 (二) 観音のかたちと場所
終章	重ねられる祈り



十一面観音像 法華寺

4. 古代日本の仏像を概観する

— 2012年、『日本美術全集2 法隆寺と奈良の寺院』

法隆寺から始まる古代の仏像を、新しく撮影した写真とともに概観したのが、冒頭に紹介した『日本美術全集2 飛鳥奈良時代1 法隆寺と奈良の寺院』（2012年、小学館）です。

教授は、法隆寺に特化した『法隆寺—美術と祈り—』の章で、『日本書紀』には欽明天皇の552年に百濟から釈迦仏の金銅像一軀、幡、天蓋、経論が献上されたことが記されており、これが日本への仏教伝と考えると説明。その後、用明天皇の587年夏には他者の幸いを願う仏像をつくるという仏教本来のあり方が示され、坂田寺に丈六三尊がつくられ、聖德太子（厩戸皇子）により四天王寺、蘇我馬子により法興寺（飛鳥寺）が建立されたと説き進み、日本での造寺造仏は用明天皇の時代以降、成立してくる。そのおもな舞台は、飛鳥、難波、斑鳩の三力所であり、その推進者は蘇我氏、司馬氏、そして聖德太子である。

と述べた上で、飛鳥時代美術（彫刻、絵画、工芸、建築）それ自体が遺っているのが法隆寺であることを説明し、金堂の釈迦三尊像（中の間）、薬師如来像（東の間）、阿弥陀如来像（西の間）、四天王像（須弥壇四隅）、毘沙門天像、吉祥天像（以上、釈迦三尊像の両わき）などの仏像の分析へと進んでいきます。そして、

法隆寺の美術は、時代と

ともに、多くの人々が紡いできたものである。それを支えたのは、よき先人に倣うという精神だっただろう。

美術には、先人の祈りの痕跡をのちに伝える役割があるのであり、後人はその祈りを引き継いでそれを守ってゆく。決して広大ではない法隆寺の境内には、るか古代の人々の祈りの跡がこれほどの密度で遺っていることはまさに奇跡というほかないが、しかし、人の心はそれを実現できるといふ、代えがたいメッセージでもあるだろう。

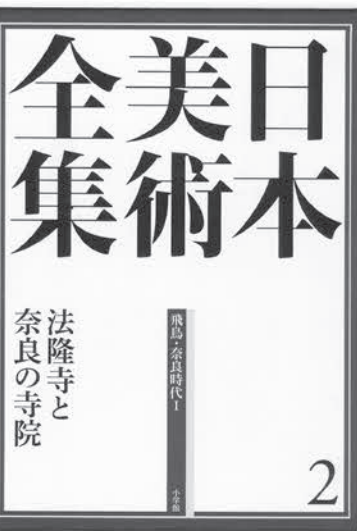
と総括。さらに「古代日本の祈りと美術」の章では、法興寺（飛鳥寺）釈迦如来像や四天王寺救世観音像から、

南都七大寺（法隆寺のほか元興寺、大安寺、薬師寺、興福寺、東大寺、唐招提寺、西大寺）などに祀られた仏像へ、兵庫県（鶴林寺観音菩薩立像・東京都（深大寺釈迦如来像）・新潟県（関山神社菩薩立像）宮城県（船形山神社金銅菩薩立像）など地方の神社仏閣に祀られた仏像

へと視野を広げ、
以上、美術に表わされた祈りの跡をたどってみた。飛鳥時代の人々は、きわめて純粋に仏教を理解していたと考えられる。大乘仏教の精神への全面的な信頼感がそこにはあつたように見受けられる。7世紀後半になると、中国的な神仙思想がそこに濃密に関わるようになる。斉明朝の石の造形はそれを象徴している。8世紀は、仏教と日本固有の神との関係が新たに構想されはじめる時代である。
とまとめています。



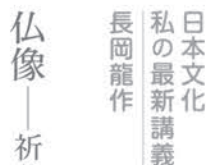
薬師如来像 法隆寺



—2014年、『日本文化私の最新講義 仏像―祈りと風景』出版

「はじめに」で、教授は、

このようにして、仏像は仏の世界とつながる場所に安置されるようになる。仏像のある場所、それ自体が人びとの他界観を深く反映しているのである。しかしながら、現世と他界との関係の結び方は一様ではない。地域や時代に応じて変容している。仏像のある風景は、そのことを考える大事な手がかりである。仏像を風景のなかにおいて考えることによって、それぞれの時代に応じた、現世とそれを超越した仏の世界との関係を考えることにつながるのだ。本書は、このような問題意識から書かれた試論である。そこには大きく二つの関心がある。一つは、他界のありよう自体を問うことであり、もう一つは、現世の風景を人びとはど



序章	祈りと風景 山水と求道—風景に真理をみる 山水画の仏教的意味 山水と感応—風景のなかで神仏とふれあう
第一章	東大寺の観音像 蓮華藏世界と観音 法華堂不空羂索観音像の姿と役割
第二章	東大寺法華堂の諸像 靈驗観音の寺 石山寺観音と靈驗 長谷寺と壺阪寺 粉河寺と靈驗
第三章	庭園と仏像 日本の山水をみる 庭園と寺 阿弥陀法と勝地 河原院と釈迦如来像

第四章 救済の場としての平等院鳳凰堂
宇治のトボス
平等院鳳凰堂の役割
鳳凰堂仏後壁
鳳凰堂空間の意義とその変容

第五章 平泉一祈りの風景
『中尊寺供養願文』にみる仏像と風景
清衡の実践と中尊寺
毛越寺と観自在王院に込められた願い
秀衡の信仰と無量光院

第六章 みちのくの観音像
山寺と観音
十一面観音像と靈驗
福島市長谷観音
天王寺と経塚

おわりに一救済を願う

のように意識し、仏の世界との関係をどのようにかたちづくったのかを問うことである。と宣言。752年に大仏が開眼供養された東

大寺(奈良県)から、石山寺、長谷寺、壺阪寺(以上、奈良県)、粉河寺(和歌山県)、河原院・平等院鳳凰堂(以上、京都府)へ、そして岩手県平泉の中尊寺・毛越寺・観自在王院・無量光院へ、さらには東北の十八夜観世音堂・宮城県・山寺・宝積院(以上、山形県)、小沼神社(秋田県)、大蔵寺・法用寺・都々古別神社・天王寺(以上、福島県)へと時代と地域を拡大。

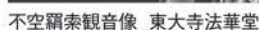
蓮華藏世界、補陀楽山、極楽浄土などを素材として人びとが仏の世界をどのように構想したのかを考える一方で、山と庭園を素材として人びとが風景を豊かにし、みずから造作をおこなって風景をつくった世界観を明らかに

にしました。

教授は「第六章　みちのくの観音像」で、
以上、みちのくの観音像をとりあげて、人
間とのかかわりを辿ってみた。そこには、仏像
をめぐる豊かな物語が遺っていることをお感
じいただけたらどうか。

観音は靈驗を期待されるために、それにふさわしい土地に安置される。しかし、観音のいる景観は、時代を通じて同じではない。同様に、観音像の意味も変容する。それにしたがって、そのかたちも造りかえられる。仏像は居場所や姿を絶えず変容させていく。当初の姿や居場所のみが像に固有なものではないのだ。それは、仏像が絶えず人びととふれ合っている証拠でもある。仏像をめぐる祈りの風景とは、仏像と人とのふれ合いの風景なのである。

と総括しています。



6. 仏像の外側へ

—2014年、『仏教美術論集5 機能論—つくる・つかう・つたえる』編集

同じ2014年1月、教授は、『仏教美術論集—竹林舎—シリーズにおいて』5 機能論—つくる・つかう・つたえる』を編集し、『美術の宗教的効果』の章で、『蓮華蔵世界と正倉院の屏風』の項を執筆しています。

本書の「はじめに」で、教授は、「美術が果たした社会的機能」という学際的な視点に答えていくことが必要であることをうたいながら、美術の機能を考えるには、それとかわる人間のありようを踏まえることが不可欠である。本巻ではそれをふたつの問題として構想したい。

その第一は宗教的实践である。儀礼に代表される実践は、特定の時とところでおこなわ

れる人間の行為である。美術はいかなる行為とどのような関係を結ぶのかという論点が想定される。

第二は空間である。仏像や仏舎利などの核となる宗教的オブジェクトは、それを荘厳する道具や安置される堂宇と一体となつて意味を作り出す。美術を空間において考えることから見えてくる問題を取り上げたい。との考えを示しています。

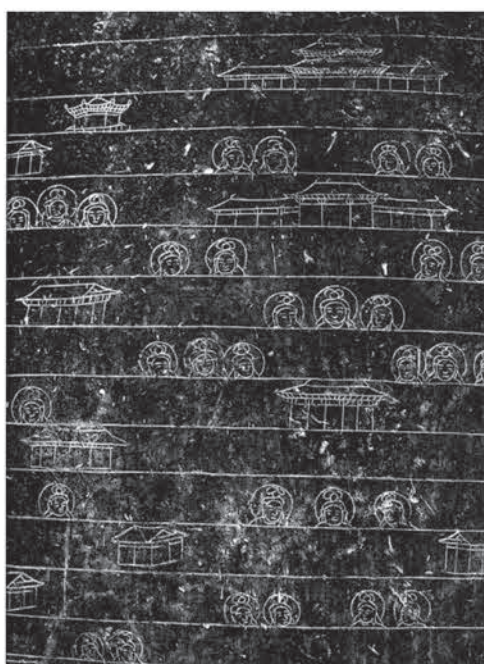
そして、『蓮華蔵世界と正倉院の屏風』の論稿では東大寺に着目。大仏、大仏殿曼陀羅、正倉院宝物などから、人びとの蓮華蔵世界と天界への想いを描きだしています。特に、聖武天皇が崩御した756年にまとめられ、東大寺に奉

納された宝物の目録

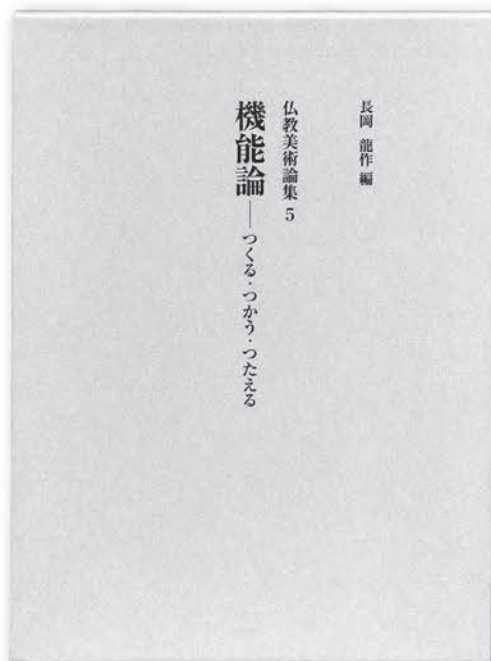
『国家珍宝帳』をもとに、そこに記載される多数の屏風を分析し、聖武天皇追善がどのように行われ、死後の世界がどのように構想されていたのかを詳述。

仏教美術を論じる叢書の一冊である本書において、屏風を中心テーマとしたことには、小さくない

意義があると考えている。以後の時代の屏風においても、類似する観点から分析が加えられることを望むからである。と、新しい論点を提示して締め括っています。屏風という調度品をとり上げることで仏像の外側にも関心を広げていきました。



盧舎那仏像台座蓮弁線刻図 東大寺



長岡 龍作 編
仏教美術論集 5
機能論—つくる・つかう・つたえる



鳥毛立女図屏風第二扇 東大寺正倉院



件名	種類	時代	掲載書
【高雄山寺】(京都府)	建築	802年登場※	①
【神護寺】(京都府)	建築	824年誕生	①
●金堂	建築		①
●毘沙門堂	建築		①
●五大堂	建築	※	①
●薬師如来立像	如来		①
【河原院】(京都府)	建築	9世紀前半	③
●釈迦如来像	如来	※	③
【法金剛院】(京都)	建築	830年	⑤
●楓里第	建築	※	⑤
【天王寺】(福島県福島市)	建築		⑤
●経塚	建築		⑤
【大蔵寺】(福島県福島市)	建築	伝坂上田村麿創建	⑤
●千手観音像	菩薩		⑤
●菩薩形立像	菩薩		⑤
●聖観音像	菩薩		⑤
【宝積院】(山形県山形市)	建築	平安時代	⑤
●十一面観音像	菩薩		⑤
【小沼神社】(秋田県大仙市)	建築	平安時代	⑤
●伝聖観音像	菩薩		⑤
●十一面観音像	菩薩		⑤
【法用寺】(福島県会津美里町)	建築	810年再建	⑤
●十一面観音像	菩薩		⑤
【都々古別神社】(福島県棚倉町)	建築	平安時代	⑤
●十一面観音像	菩薩		⑤
【那智経塚】(和歌山県)		平安時代～	④
●菩薩半跏像	菩薩		④
●十一面観音立像	菩薩		④
【十八夜観世音堂】(宮城県)	建築	835年創建	⑤
●菩薩立像	菩薩		⑤
【中尊寺】(岩手県平泉)	建築	850年	⑤
●中尊寺伽藍	建築		⑤
●中尊寺金色堂	建築		⑤
●釈迦堂	建築	※	補遺
●金色釈迦如来像	如来	※	補遺
●両界堂	建築	※	補遺
●供養願文			⑤
●三間四面松皮葺堂	建築	※	⑤
●丈六普金色釈迦三尊像	如来	※	⑤
●一字金輪像	如来		⑤
●金字宝塔曼陀羅	絵画		補遺
【毛越寺】(岩手県平泉)	建築	850年	⑤
●諸堂		※	⑤
●諸仏		※	⑤
【法成寺】(京都府)	建築	平安中期	補遺
●釈迦堂	建築	※	補遺
【大覚寺】(京都府)	建築	876年	⑤
●嵯峨院	建築	※	⑤
【棲霞寺】(京都府)	建築	896年頃	⑤
●庭園	建築		⑤
●阿弥陀三尊像	如来		⑤
【河原院】(京都府)	建築	991年造立	⑤
●釈迦如来像	如来	※	⑤
【平等院鳳凰堂】(京都府)	建築	1052年	⑤
●阿弥陀如来像	如来		⑤
●仏後壁前面画	絵画		⑤

7. 東北の仏像の基礎的調査
— 中尊寺を中心とする奥州の美術工芸品の総合的調査研究

並行して、教授は、平泉の仏教美術への関心を深めていきました。

1999年、文部科学省の科学研究費補助金「基盤研究A」の補助を受け、有賀祥隆名誉教授当初は、文学研究科教授を研究代表者とする「中尊寺を中心とする奥州藤原文化圏の美術工芸品に関する総合的調査研究」に参加。1999年、2003年、2006年、2009年、2013年に、それぞれ研究成果報告書をまとめています。



■「基盤研究A」の成果

科学研究費補助金(基盤研究A)研究成果報告書
(研究代表者:有賀祥隆名誉教授)

- ① 中尊寺を中心とする奥州藤原文化圏の美術工芸品に関する総合的調査研究：平成八・九・十年度
- ② 中尊寺を中心とする奥州藤原文化圏の宗教彫像に関する調査研究：平成十二・十三・十四年度
- ③ 奥州仏教文化圏に遺る宗教彫像の基礎的調査研究：平成十五・十六・十七年度
- ④ 東日本に分布する宗教彫像の基礎的調査研究—古代から中世への変容を軸に：平成十八・十九・二十年度
- ⑤ 生身と雲験—宗教的意味を踏まえた仏像の基礎的調査研究：平成二十三・二十四・二十五年度

この間、2010年には、「特別展 平泉 みちのくの浄土」図録（NHK仙台放送局、NHKプラネット東北制作）において、「特論」中尊寺創建伽藍における「基の塔」と「中尊」のタイトルで二文を執筆。先の調査研究も踏まえながら分析した結果をまとめ、
以上述べてきたことを踏まえれば、「中尊寺」という寺号の由来もまたあきらかになるだろう。江戸時代の相原友直が正しく考証したように（『平泉雜記』）、山頂の「基の塔」に安置された仏像こそが「中尊」である。「基の塔」の仏眼仏母像は、白河関から外浜に至る世界の中心に君臨した。そして同時に、旅人が目指す究極の法身となった。清衡によるこの構想には、菩薩行の実践という意味があったと想定される。国土内の領民を救済へと導く菩薩に自らを擬したに違いないのである。
と結んでいます。

最後に：資料メモ

6で触れた『仏教美術論集』シリーズの『1 様式論—スタイルとモードの分析』は、仏教美術の作品様式を「彫刻」「絵画」「建築物」「工芸」と分類しています。

この彫刻を構成しているのが仏像です。初期仏教では「仏」とはゴータマ・シッダルタ(釈尊、釈迦如来)を指しましたが、大乘仏教の発達とともにさまざまな「仏」の像が造られるようになり、「如来(釈迦如来・盧舎那仏・薬師如来・阿弥陀如来・大日如来等)」、「菩薩(観音菩薩・地藏菩薩・普賢菩薩・文殊菩薩・弥勒菩薩等)」、「明王(不動明王・孔雀明王等)」、「天部(四天王・八部衆・金剛力士・梵天・帝釈天・吉祥天・弁財天等)」、「その他(垂迹神・羅漢・聖徳太子・弘法大師等)」に大別されるようになりました。

このような分類に従い、長岡教授の一連の著作・論稿において取り上げている物件をリストアップしてみました。ここには、現存しているものと、資料の中にのみあり、現存していないものの両方が含まれています。

■長岡龍作教授の著作・論稿でとりあげている仏教美術の主なリスト

※現存していないもの

[illegible]

文学部へ行こう

東北大学は1907年(明治40)6月22日に創立し、文学部の前身である法文学部は1922年(大正11)に開設されました。2011年、東北大学も3.11東日本大震災の被害を免れませんでした、その体験も活かしながら、さらに研究、教育活動を深めています。

総合性(リベラルアーツ)を世界へ、地域へ

文学研究科・文学部では、文学研究の総合性(「リベラルアーツ」と呼ぶことがあります)を大学の中に留めてしまおうのではなく、幅広い人々に理解してもらい、役立ててもらえるものにしようと、地域へ、日本へ、世界へと視野を広げ、交流を深め、社会連携・知の循環を模索しています。

「世界へ」の視点では、「文化理解(解釈)のキーワード」をテーマとしての国際シンポジウムなどが進んでいます。このキーワードは、「有備館講座」や「齋理蔵の講座」などの公開講座のテーマともなっています。

国際学術交流事業「国際シンポジウム」の継続

「文化理解(解釈)のキーワード」をテーマとした国際学術交流事業の一つとしては、イタリアのローマ大学サピエンツァ文学部・東洋研究学部、オランダのライデン大学文学部との連携による「国際シンポジウム・共同討論」があります。

2013年のローマ、2014年のライデンでの開催に続き、2015年6月27日に東北大学文学研究科において第3回を開催。「Workshop "Disciplines Meeting" Japanese and European approaches to

Cultural Transmission」のタイトルで、学生、一般人が聴講できるよう公開しました。



2015年 東北大学シンポジウム

どの外国人留学生を短期受入れし、文学研究科・文学部の学生と交流する機会を作り上げていこうというものです。

受入れ枠を2014年の7名から2015年には10名へと増やし、ヨーロッパが満ちあふれるキャンパスというイメージづくりを進めています。

「実践宗教学寄附講座」の継続

企業・団体等との連携・協力の取り組みとしては、臨床宗教師を育てる「実践宗教学寄附講座」が、2015年度から2年間の講座延長となりました。

東日本大震災以後の精神状況に、応え、宗派・教派を超えて「心の相談」に取り組んでいく宗教人を養成しようという新しい試みです。宗教者を中心とした支援により始められ、2014年度までの3年間で6回の臨床宗教師研修を行い、95名

「21世紀のシールボルト養成プログラム」の継続

日本学生支援機構の「海外留学生支援制度」の認定を受けた「複数領域横断型日本学研修プログラム」として、2014年10月からスタートした「21世紀のシールボルト養成プログ

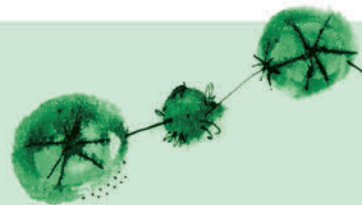
ラム」が、2015年度も継続となりました。

フォン・シールボルトが教壇に立ったオランダのライデン大学をはじめ、イタリア、フィンランド、インドネシアな

の研修修了者が全国各地での活動へと進んでいます。



21世紀のシールボルト養成プログラム



「有備館講座」の開催

大崎市との連携で開催している公開講座「有備館講座」は、5月・高原准教授「震災後の『幽霊』と宮城県の宗教」、6月・横溝博准教授「日本古典文学の伝授」が終了。7～9月は、次

のような日程となっています。受講料500円。開催日の前日まで電話で申し込み可能です。☎0229-720357(岩出山公民館)

- 7月11日(土)
高橋章則教授「地域文化再発掘～三本木の狂歌～」(三本木公民館)
- 8月8日(土)
永吉希久子准教授「社会調査データから見る世界の中の日本」(岩出山公民館)
- 9月26日(土)
黒岩卓准教授「日本における中世フランス文学研究」(岩出山地域福祉センター)



有備館講座

「齋理蔵の講座」の開催

丸森町との連携で開催している公開講座「齋理蔵の講座」は、「学びの作法」対象としての「ツボン」方法としての「ツボン」をテーマに、下記のよう

な日程で6～10月の講座が進んでいます。後期日程の受講希望者は、丸森町教育委員会生涯学習課生涯学習班へお問い合わせ、お申し込みください(5回分受講料2000円)。☎0224-723036(丸森町役場教育委員会事務局)

- 6月6日(土)
鹿又善隆准教授「日本の縄文文化は海を越えたのか？」
- 7月4日(土)
原望准教授「日本における市民参加の意味と課題～裁判員裁判を例として～」
- 8月1日(土)
谷山洋三准教授「死を見つめる宗教性」
- 9月5日(土)
筆橋俊光准教授「仙台藩の大肝入～藩と地域社会～」
- 10月3日(土)
浜田宏准教授「主観的幸福と差応対的剥奪～日本の幸福度～」



齋理蔵の講座

人文社会科学講演シリーズⅧの刊行

この講座の内容は、講演出版企画委員会(委員長：高橋章則教授)から「人文社会科学講演シリーズ」のタイトルで単行本にまとめられ、東北大学出版会から発行されて社会に広がります。

2015年3月には、シリーズ最新版としてⅧ「文化理解のキーワード」が刊行されました。2013年5月～2014年10月に開かれた「有備館講座」と「齋理蔵の講座」の講演が収録されています。





文学部へ行こう

キャンパスの変化も大きな力に

東北大学では、東日本大震災からの復旧・復興の取り組みも含めてキャンパスリニューアルが続いています。川内南キャンパスの文学研究科・文学部周辺でも次々に変化があり、研究、教育、交流などの環境が向上しています。

研究棟、講義棟のリニューアル

文学研究科・文学部研究棟の耐震化などの工事の締め括りとして、前庭がリニューアル。緑の美しい環境となりました。



また、法学部、経済学部と共に利用する文系総合講義棟の新築工事が完成。学生は新しい教室で気分一新、講義に集中しています。



東北大学附属図書館の進化

川内南キャンパスの文系学部に隣接している東北大学附属図書館も、リニューアルで利用環境が飛躍しています。

例えば、「グローバル学習室」が

オープン。英語多読、留学生向け図書、語学学習、留学関係資料、留学情報、外国語一般雑誌・新聞、音読ブースなどがあり、外国人留学生にとっても、海外を目指す日本人学生に



とっても利用価値の高い場所になっています。

学習室では、カフェのような雰囲気と言葉や文化について触れ合う、イタリア語、英語、台湾中国語、ベトナム語、タイ語、中国語、インドネシア語、ドイツ語の「グローバル・カフェ」も毎週開かれています。

なお、留学生コンシェルジュも設置され、各種問合せ、相談に応えるシステムになっています。

また、入口ロビーにはシアトルズベストコーヒーのカフェがオープン。暖かい季節にはカフェテラスも開かれ、くつろぎながら読書もできるようになりました。

ちなみに、東北大学附属図書館は学外の人でも正式の手続きをすれば、図書カードが発行され、自由に入館利用できるようになります。

☎ 022-795-5943



東北大学では2007年の東北大学創立100周年時に記念賞を制定。河北新報社、株式会社七十七銀行、日本GEE株式会社の協賛をいただき青春のエッセーを募集し、2015

現在、9月30日の原稿締切、11月3日の選考結果発表の日程で、全国の高校生(高専1~3年生も含む)に対して「青春のエッセー 阿部次郎記念賞」の募集を行っています。

阿部次郎(1923~45年、東北大学法文学部在職。哲学・美学)は、夏目漱石の門下生であり、「三太郎の日記」などの作品でも有名な研究者です。仙台市青葉区土樋に阿部次郎記念館があり、資料や身の回り品が収蔵、展示されています。

「青春のエッセー 阿部次郎記念賞」第9回作品募集中

インフォメーション1

現在、9月30日の原稿締切、11月3日の選考結果発表の日程で、全国の高校生(高専1~3年生も含む)に対して「青春のエッセー 阿部次郎記念賞」の募集を行っています。

今年度の課題作品の課題は「ライバル」・ゲスト選考委員は小池光氏(歌人。東北大学理学部卒。仙台文学館館長となっています。全国の高校生の皆さんの応募をお待ちしています。

なお、第1~8回の作品は、それぞれ作品集にまとまっています。また、第1~3回の作品は中国語版作品集『思考的作品』となつて、上海の出版社(山東文藝出版社)から発行され、日中間の相互理解の資料となっています。作品集は若干の在庫がありますので、事務局宛てお申し込みください。

問合せ先・阿部次郎記念賞運営委員会事務局(<http://www.sai.tohoku.ac.jp/pg45.htm>)

■2014年度の選考結果

2014年度は、128点の作品の応募をいただき、選考の結果、下記のように決まりました。

そして2014年11月3日、「紅葉の賀」の場で、表彰、講評を行いました。

課題作品の部 課題「ふるさと」

- 最優秀賞 「ひとつ」 眞関佳鈴さん(長野県 長野高等学校1年)
- 優秀賞 「白樺の煙」 宮下瑛帆さん(長野県 長野高等学校1年)
- 「マイホームタウン」 リュウ・ジュンイさん(長野県 長野高等学校1年)

自由作品の部

- 最優秀賞 「ジャンプ・アウト」 岩切真里奈さん(宮城県 宮崎大宮高等学校1年)
- 優秀賞 「受動的多重人格」 堀越望実さん(長野県 長野高等学校1年)
- 「毒虫」 木藤雅章さん(東京都 玉川学園高等学校2年)
- 学校賞 長野県 長野高等学校 宮城県 宮崎大宮高等学校

「青春のエッセー」の講評、表彰の場となる予定の「紅葉の賀」は、東北大学植物園をメイン会場として、文学研究科と植物園の共催で開催する恒例行事です。

植物園では、紅葉間近の環境の中で野点、俳句会、尺八演奏、植物園内ガイド付き散策などが行われます。それに続く公開講演会(講師…岩手大学人文社会学部樋口知志教授)、「青春のエッセー」選考結果報告会、俳句会授賞式などは、文学部第講義室が会場となります。

11月3日、「紅葉の賀」開催

インフォメーション2



図書館で見られる文学研究科・文学部の研究成果

附属図書館では、2号館が多彩な学術雑誌の宝庫となっています。文学研究科・文学部では各研究室から表のような学術雑誌が発行されていますが、その多くを図書館で閲覧することができます。

■文学研究科・文学部研究室発行の学術雑誌(順不同)

文芸研究	国文学研究室・ 国語学研究室・ 日本思想史研究室
日本文芸論叢	国文学研究室
試論(SHIRON)	英文学研究室
Explorations in English Linguistics	英文学研究室
東北ドイツ文学研究	ドイツ文学研究室
人形芝居	ドイツ文学研究室
フランス文学研究	フランス文学研究室
東北大学中国語学文学論集	中国文学研究室
集刊東洋学	中国思想研究室・ 中国文学研究室・ 東洋史研究室
東北大学言語学論集	言語学研究室
東北大学言語科学論集	言語科学専攻
国語学研究	国語学研究室
思索	哲学・倫理学合同研究室
モラリア	哲学・倫理学合同研究室
東北哲学会年報	哲学・倫理学合同研究室
美術史学	美学西洋美術史研究室・ 東洋日本美術史研究室
論集	宗教学研究室・ 印度学研究室
社会学研究	社会学研究室
環境社会学研究	社会学研究室
Tohoku Psychologica Folia	心理学研究室
東北心理学研究	心理学研究室
西洋史研究	ヨーロッパ史学研究室
東北大学東洋史論集	東洋史研究室
国史談話会雑誌	国史研究室
歴史	国史研究室
東北大学考古学研究報告	考古学研究室
年報日本思想史	日本思想史研究室
日本思想史研究	日本思想史研究室
東北宗教学	宗教学研究室



書庫室には「IRIDeSライブラリー」と名づけられたコーナーもあり、例えば1978年に起こった宮城県沖地震の被害写真、新聞切り抜き、復旧工事の資料、報告書などが保存され、相談があれば学内者の利用には応えるというシステムになっています。

伝録のくみちの 取り組みのアーカイブ災害



2011年3月11日、東北地方太平洋沿岸部を襲った地震及び津波は想定を超えたものであったことから、復興・復興も含めて今後の防災・減災対策のための取り組みが切実なものとなりました。東北大学では、「東北大学防災科学研究拠点」を改組、発展させ、2012年4月の「東北大学防災科学研究国際研究所（以下、IRIDeSと略称）」発足へと進みました。

その活動の一つとして立ち上げられたのが災害アーカイブ研究であり、2011年9月、東日本大震災アーカイブ・プロジェクト「みちのく震録伝（しんろくでん）」が開始しました。産学官の機関と連携して、岩手・宮城・福島を中心に東北地方全域から東日本大震災に関するあらゆる記憶、記録、事例、知見を収集し、アーカイブ化して国内外や未来に伝承し共有することを目指すものです。10のテーマに分かれたワーキンググループ（以下、WG

と略称）が組織され、文学部・阿部恒之教授（心理学）がプロジェクトチームのアドバイザーとして参加しています。

その二つのWGの取り組みが、県内15市町村（気仙沼・南三陸・女川・石巻・東松島・松島・利府・塩竈・七ヶ浜・多賀城・仙台・名取・岩沼・亘理・山元で公募した）「みちのく・いまをつたえ隊」の活動とアーカイブ化です。

地域のすみずみで、被災の記録や証言の収集をはじめ、住民の現在の暮らしや日頃の考え、未来への想いなど、地域のさまざまな「残したい、伝えたい」情報を収集。集めたすべての資料は今、2014年11月に東北大学青葉山新キャンパスに完成したIRIDeS研究棟に設置された「書庫室」に保管され、将来の多様な利用に対応できるよう、緻密な項目分類、内容を示すキーワードやフレーズ、センチンスによるタグ付けが行われ、アーカイブ化が進められています。写真データや映像データ、解析データなどを含めて収集した資料総数は35〜40万件にのぼり、そのうちの13万点ほどがアーカイブ化され、ウェブでの公開、書籍類は東北大学附属図書館での閲覧が可能になっています。



宮城県内15市町村の「みちのく・いまをつたえ隊」は、収集漏れが起こらないよう、東日本大震災以後のあらゆる伝承資料を収集。IRIDeS研究棟の書庫室に保管し、プロジェクト事務局スタッフがアーカイブ化を進めています。

